静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第26集

上伊太遺跡

第二東名No.89地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

島田市－7

２０１３

中日本高速道路株式会社東京支社
静岡県埋蔵文化財センター

序

本書は、第二東名高速道路の建設に伴い、旧島田市域で平成10年度から11年度にかけて行われた確認調査の概要および、確認調査の結果、遺跡の存在が明らかになり、平成11年５月から平成12年１月にかけて本調査が実施された島田市伊太に所在する上伊太遺跡の発掘調査報告書です。

上伊太遺跡は伊太谷川上流域の丘陵に面した低地部に位置しており、今回の調査により、弥生時代後期から古墳時代前期および中世から近世の集落の存在が明らかになりました。

弥生時代後期から古墳時代前期の遺構としては、掘立柱建物・竪穴住居・溝状遺構などが発見されており、住居の建て替えが繰り返し行われ、集落が継続して営まれていたと考えられます。伊太谷川流域で弥生時代後期から古墳時代前期の集落が発見されたのは初めての例であり、大津谷川流域や瀬戸川流域で既に発見されている遺跡と同様に、志太地域の丘陵部から丘陵縁辺の低地部にかけて展開する集落の一つであることが確認されました。

中世から近世の遺構としては、調査区北東部を中心に複数の杭列が発見され、遺跡周辺で鎌倉時代から江戸時代前半にかけての長期間にわたって水田が営まれていたことが判明しました。伊太谷川の小規模な氾濫に伴って水田の作り直しが行われていた可能性があるものの、大井川の洪水による被害を直接受けることがなく、集落が比較的安定して継続していたものと考えられます。

本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、現地調査及び資料整理並びに本書の作成にあたり、中日本高速道路株式会社東京支社ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2013年２月

静岡県埋蔵文化財センター所長

勝　田　順　也

例　　言

1　本書は、静岡県島田市伊太に所在する上伊太遺跡（第二東名No.89地点）の発掘調査報告書である。

2　現地調査及び整理作業は、第二東名高速道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、中日本高速道路株式会社（旧日本道路公団静岡建設局）の委託を受け、静岡県教育委員会文化財保護課（旧静岡県教育委員会文化課）の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施し、平成23年度以降は、静岡県埋蔵文化財センターが同研究所の業務を引き継いで実施した。

3　上伊太遺跡（第二東名No.89地点）の確認調査・本調査及び資料整理の期間は以下のとおりである。

確認調査（その１）：平成10年11月～平成11年３月	調査対象面積11,499㎡
確認調査（その２）：平成11年８月	調査対象面積2,263.5㎡
本調査Ⅰ期：平成11年５月～９月	調査対象面積1,083.8㎡
本調査Ⅱ期：平成11年11月～平成12年１月	調査対象面積308㎡
資料整理・報告書作成：平成23年１月～平成25年２月	

4　調査体制は、第２章第１節に明記した。

5　本書の執筆は、常勤嘱託員五味奈々子が行った。

6　本書の編集は、静岡県埋蔵文化財センターが行った。

7　現地での基準点測量、空中写真撮影および遺構測量の一部は株式会社フジヤマに委託した。整理作業・保存処理業務は株式会社パソナに委託した。

8　本書の作成にあたっては、以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。
伊藤通玄、篠原和大、諏谷昌彦、藤澤良祐（五十音順・敬省略）

9　発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

1　本書で用いた遺構・遺物などの位置を表す座標は、すべて平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）を基準とした。

2　本書で使用した遺構の表記は次のとおりである。

例）SH01（SH：遺構の種別　01：遺跡内の全遺構通し番号）

SA：杭列　SH：竪穴住居跡　SB：掘立柱建物跡　SD：溝状遺構

SX：性格不明遺構　SP：小穴

3　遺構図、遺物実測図の縮尺はそれぞれの図に明記した。

4　遺物番号は、挿図掲載遺物について通し番号を付している。

5　色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帳』（農林水産省技術会議事務局監修1992）を使用した。

6　本書の図中に用いたスクリーントーンなどの使い分けについては、必要なものを各図の中で表記している。

7　本文中に記載した陶器の編年は藤澤2005に、山茶碗の編年は河合2001に準拠している。

目　　次

序／例言／凡例／目次

第１章　位置と環境 …… 1
　第１節　位置と地理的環境 …… 1
　第２節　歴史的環境と調査歴 …… 1

第２章　確認調査 …… 5
　第１節　調査の体制 …… 5
　第２節　確認調査の対象地点 …… 5
　第３節　確認調査の方法と経過 …… 6
　第４節　各地点の概要 …… 9

第３章　本調査 …… 18
　第１節　発掘調査の方法と経過 …… 18
　第２節　資料整理の方法と経過 …… 20

第４章　上伊太遺跡の調査成果 …… 21
　第１節　概　要 …… 21
　　１　地　形 …… 21
　　２　土　層 …… 21
　　３　遺構・遺物の概要 …… 24
　第２節　調査成果 …… 24
　　１　１区の遺構と遺物 …… 24
　　２　２区の遺構と遺物 …… 26
　　３　３区の遺構と遺物 …… 42
　　４　４区の遺構と遺物 …… 43
　　５　５区の遺構と遺物 …… 46

第５章　まとめ …… 60
　第１節　弥生時代後期～古墳時代前期の遺構と遺物 …… 60
　第２節　古代～近世の遺構と遺物 …… 61

写真図版／抄録

挿図目次

第１図　遺跡の位置と周辺遺跡分布図 …… 2
第２図　第二東名の路線と対象地点 …… 6
第３図　№88地点確認調査対象範囲 …… 8
第４図　№88地点確認調査トレンチ配置図 … 8
第５図　№89地点確認調査対象範囲 …… 9
第６図　№89地点確認調査トレンチ配置図 … 10
第７図　№89地点確認調査出土土器１ …… 12
第８図　№89地点確認調査出土土器２ …… 14
第９図　№89地点確認調査出土木製品・
　石製品・玉類 …… 15
第10図　№90地点確認調査対象範囲 …… 17
第11図　№90地点確認調査トレンチ配置図 … 17
第12図　周辺地形と本調査区 …… 19
第13図　グリッド配置図 …… 20
第14図　１～３区土層断面図 …… 22
第15図　４区土層断面図 …… 23
第16図　第１面遺構全体図 …… 25
第17図　１区出土土器 …… 26
第18図　SA02・03平面図・断面図 …… 27
第19図　SA04平面図 …… 28
第20図　２区第２面遺構全体図 …… 29
第21図　SH01平面図・断面図 …… 30
第22図　SH02平面図・断面図 …… 31
第23図　SB01・02平面図・断面図 …… 32
第24図　SD01・05～08平面図・断面図 …… 33
第25図　SD03・04平面図・断面図 …… 34
第26図　SP01・05・06・08・17・
　18・34・36平面図・断面図 …… 35
第27図　２区出土土器１ …… 37
第28図　２区出土土器２ …… 39
第29図　２区出土土器３ …… 40
第30図　２区出土石器・木製品 …… 41
第31図　３・４区出土土器 …… 42
第32図　SA07・08平面図・断面図 …… 44
第33図　４区出土木製品 …… 45
第34図　５区遺構全体図・土層断面図 …… 47
第35図　SX01・02検出状況 …… 48
第36図　５区出土土器１ …… 49
第37図　５区出土土器２ …… 50
第38図　５区出土石器・木製品、
　出土金属製品 …… 51
第39図　出土銭貨 …… 52

挿表目次

第１表　周辺遺跡一覧 …… 3
第２表　旧島田市域の調査体制 …… 5
第３表　調査実施期間 …… 7
第４表　土器観察表 …… 54
第５表　石器・石製品・玉類観察表 …… 58
第６表　木製品観察表 …… 59
第７表　金属製品観察表 …… 59
第８表　銭貨観察表 …… 59

写真図版目次

図版１　１．遺跡遠景（北西より）
　２．遺跡遠景（南西より）
図版２　１．遺跡遠景（南東より）
　２．４区調査前状況（北西より）
　３．４－１トレンチ完掘状況（南より）
図版３　１．17－1トレンチ土器出土状況（南東より）
　２．７－１トレンチ土器出土状況（南西より）
　３．４－２トレンチ土器出土状況（西より）
　４．１区SA01検出状況（北東より）
　５．A・Bトレンチ完掘状況（南西より）
図版４　１．１区キセル出土状況（南より）
　２．１区銭貨出土状況（南より）
　３．２区全景
　４．２区SA02・03検出状況（南東より）

図版５　１．２区全景（北東より）
２．２区SA03検出状況（東より）
図版６　１．２区SP34土器出土状況（北東より）
２．２区SH01土器出土状況（南より）
３．２区SA03内土器出土状況（南より）
４．２区SP36土器出土状況（東より）
５．２区SD01土層断面（南東より）
６．２区南壁土器出土状況（北より）
７．２区乳棒状磨製石斧出土状況（西より）
８．２区石製品出土状況
図版７　１．１区・２区第２面遠景
２．２区第２面全景
３．２区SH01完掘状況（南西より）
図版８　１．２区SB02完掘状況（南より）
２．３区遠景
３．３区全景
４．３区北壁東側土層堆積状況（南より）
５．３区北壁中央土層堆積状況（南より）
図版９　１．３区北壁西側土層堆積状況（南より）
２．４区SA08検出状況（北西より）
３．４区SA07検出状況（南西より）
図版10　１．４区SA07断面（南より）
２．４区SA08杭列断面（南より）
３．４区山茶碗出土状況（北より）
４．４区第２面木製品出土状況（東より）
５．４区木製品出土状況（北より）
６．４区第１面木製品出土状況
７．４区木製品出土状況（南より）
８．５区SX01・02遺物出土状況（東より）
図版11　１．５区SX01・02検出状況（南より）
２．５区SX01・02検出状況（北より）
３．５区SX02検出状況（南西より）
図版12　１．５区SX02検出状況（南より）
２．５区SX02半截状況（南より）
３．５区SX02完掘状況（南より）
図版13　１．５区完掘状況（東より）
２．５区西側小穴群完掘状況（東より）
図版14　１．５区SP71完掘状況（北より）
２．５区SP74上面検出状況
３．５区SP74下面検出状況
４．５区SP77木製品出土状況（西より）
５．５区SP76・77完掘状況（北西より）
６．５区銭貨出土状況（西より）
図版15　確認調査出土土器１
図版16　１．確認調査出土土器２
２．１区出土土器
３．２区SP36出土土器
４．２区SD01出土土器
５．２区SH01出土土器
図版17　１．２区SP34・36出土土器
２．２区遺構外出土土器１
図版18　１．２区遺構外出土土器２
２．弥生土器・古式土師器集合
図版19　１．２区遺構外出土土器３
２．２区遺構外出土土器４
３．３・４区出土土器
４．５区SX01出土土器１
図版20　１．５区SX01出土土器２
２．５区遺構外出土土器
図版21　１．５区出土土器集合１
２．５区出土土器集合２
図版22　１．５区出土土器集合３
２．確認調査出土土器集合１
図版23　１．確認調査出土土器集合２
２．１区出土土器集合
図版24　１．２区出土土器集合１
２．２区出土土器集合２
図版25　１．墨書土器集合
２．３区出土土器集合
３．４区出土土器集合
４．確認調査出土石製品・玉類
図版26　１．石器集合
２．確認調査出土木製品
図版27　１．２区出土木製品
２．４区出土木製品
３．確認調査・５区出土木製品
図版28　１．確認調査出土金属製品・銭貨
２．１区・５区出土金属製品・銭貨
３．２区出土銭貨

第1章　位置と環境

第1節　位置と地理的環境

赤石山系に流れを発する大井川は、北側上流部の四万十帯三倉層群を開析して流れ、井川、接岨峡、鵜山七曲りなど穿入曲流を発達させる。やがて、必従河川の家山川と合流し、下流の鍋島で大きく蛇行し、伊久美川と合流し鵜網や神座を左にみて流れる。現在の大井川の神座より下流の流路は牛尾原と渡口の間を流れる。ここは、大井川の対岸にある相賀の丘陵と低い尾根によってつながっていたと言われ、天正の瀬変えにより牛尾山鼻と相賀渡口の間に大井川の流れが変えられたとされている。

伊太谷川は、この大井川の主流に沿う相賀から中村に伸びる丘陵を一つ挟んだ東側を南北方向に流れている。伊太谷川は標高130mの田代から流れを発して、途中の標高310mの矢倉山の急峻な縁辺部を流れ下り、下流部の上伊太・伊太の平坦面を開析し、下流の向谷元町で大きく東側に湾曲する。その後、中溝町、中河町を南東に流れ、元島田の白岩寺の丘陵で大津谷川と合流する。大津谷川は元来栃山川の支流であったが、現在では放水路により高島田で大井川の本流に合流している。

上伊太遺跡は、伊太谷川により大きく開析された上伊太地区に存在する。開析により作られた南北に伸びる狭い平坦面は水田などに、丘陵部と平坦部の接点は宅地や梅畑などに、丘陵部は茶畑、竹林、雑木林などに利用されている。

第2節　歴史的環境と調査歴

上伊太遺跡は、第二東名の建設に伴う調査により新たに把握された遺跡である。本節では周辺遺跡の概要を時代ごとに記す（第1図・第1表）。

旧石器時代

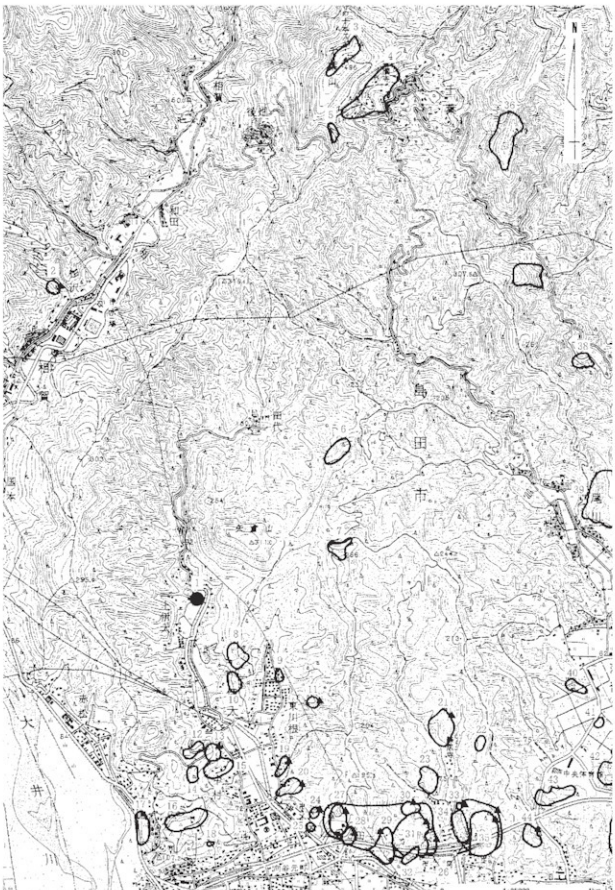
旧石器時代の遺跡は、大井川や伊太谷川を眼下に見下ろす丘陵部先端に立地している。大鳥遺跡（17）は、大井川左岸の丘陵先端部に位置し、大型のナイフ形石器や尖頭器などが出土している。また、伊太谷川左岸の丘陵上に立地する旗指古窯4地点（29）および6地点（31）でも石核や剥片などが出土している。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、伊太谷川・大津谷川・東光寺谷川流域の河川に沿った丘陵上に分布している。

大井川左岸の丘陵先端部に立地する大鳥遺跡（17）では、早期の撚糸文土器や押型文土器、前期の木島式土器などが出土している。また、伊太谷川下流の南東方向の流路に面した丘陵先端部には、旗指古窯1地点（27）・2地点（28）・4地点（29）などが分布している。旗指古窯1地点（27）では草創期の竪穴状遺構1基、草創期の尖頭器、石匙、土器片、中期前葉の土器などが出土しており、旗指古窯2地点（28）でも、土器片と有舌尖頭器、石鏃などが出土している。旗指古窯4地点（29）では、縄文土器片、有舌尖頭器、石鏃等が出土している。

こうした眼下に川を望む丘陵部先端に立地する遺跡に対し、谷に直接面していない丘陵上の平坦部などに立地する例も見られる。尾川平遺跡（6）は伊太谷川上流の東側に位置する丘陵上の平坦部に立地しており、土坑が検出され、五領ヶ台式土器、北屋敷式土器、勝坂式土器、土偶、打製石斧、石鏃など



第１図　遺跡の位置と周辺遺跡分布図

が出土している。八幡社裏遺跡（８）・八幡社前遺跡（10）は伊太谷川右岸に面した丘陵上に位置している。八幡社裏遺跡（８）では土器片、石鏃、石斧などが出土しており、八幡社前遺跡（10）では中期末の土器片や石鏃などが出土している。一方、大津谷川上流の丘陵上や丘陵縁辺部には大段遺跡（36）や竹ノ尾遺跡（38）などが立地しており、大段遺跡（36）では黒曜石片、竹ノ尾遺跡（38）では縄文土器を採集している。

弥生時代

弥生時代になると、谷に面した丘陵部および後背湿地の発達した平坦部に遺跡が集中するようになる。大井川左岸に面した丘陵端部に位置する大鳥遺跡（17）からは弥生時代の土器片が出土しており、大津谷川流域に面した丘陵上に分布する落合西遺跡（40）・鳥羽美遺跡（41）・田ノ谷遺跡（43）では、弥生時代後期の住居跡が検出されており、古墳時代前期まで集落の形成が続いている。また、伊太谷川流域の丘陵に面した平坦部に立地する上伊太遺跡（１）では、発掘調査により、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての住居跡・掘立柱建物などが検出された。詳しくは本書の中で述べる。

古墳時代

志太地域の前期古墳の多くは丘陵上に作られる小型墳であり、伊太谷川および大津谷川流域付近では、旗指３号墳（32）・鳥羽美古墳（41）などの方墳が志太平野に面した丘陵上に築かれている。旗指３号墳（32）では箱形木棺が検出されており、ガラス玉が出土している。鳥羽美古墳（41）では箱形木棺が２か所で検出され、ヤリガンナ、鉄鏃、銅鏃、鉄剣等が出土している。

後期の古墳は、志太平野に面した丘陵上に集中して築かれている。天神原古墳群（18）では横穴式石室の１号墳・２号墳が見つかっているが、２基とも消滅している。伊太口古墳群（25）では１号墳から３号墳の３基が知られ、いずれも横穴式石室を持つ円墳である。旗指古墳群（32）の１・２・４・５号墳はいずれも横穴式石室を主体部とする後期の円墳と思われる。

古代～中世

伊太谷川流域の低地部に立地する上伊太遺跡（１）では、今回の発掘調査で中世から近世にかけての

第１表　周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺構名	時代	種別
1	上伊太遺跡	弥生・古代・中世・近世	集・散	23	静居寺前古窯C地点	古代・中世	古窯
2	相賀古窯	古代・中世	古窯	24	伊太口古窯	古代・中世	古窯
3	千葉遺跡	古代・中世	散布地	25	伊太口古墳群	古墳	古墳
4	智満寺	古代・中世	社寺	26	旗指遺跡	縄文・古墳・古代・中世	集・窯
5	千葉山展望台	古代・中世	散布地	27	旗指古窯第１地点	縄文・古代・中世	散・窯
6	尾川平遺跡	縄文	散布地	28	旗指古窯第２地点	縄文・古代	古窯
7	立合遺跡	弥生	散布地	29	旗指古窯第４地点	縄文・古代	散・窯
8	八幡社裏遺跡	縄文・古墳・古代	散布地	30	静居寺前古窯D地点	古代・中世	古窯
9	東川根上遺跡	古代	散布地	31	旗指古窯第６地点	古代	古窯
10	八幡社前遺跡	縄文	散布地	32	旗指古墳群	古墳	古墳
11	東川根Ⅰ古窯	中世	古窯	33	静居寺前古窯A地点	古代・中世	古窯
12	中村Ⅰ遺跡	古代	散布地	34	旗指古窯第７地点	古代	古窯
13	中村地蔵尊前古窯	古代・中世	古窯	35	旗指古窯第８地点	古代	古窯
14	中村Ⅱ遺跡	古代	散布地	36	大段遺跡	縄文	散布地
15	中村Ⅲ遺跡	古代	散布地	37	大津山遺跡	古代・中世	散布地
16	天神原遺跡	縄文	散布地	38	竹ノ尾遺跡	縄文	散布地
17	大鳥遺跡	縄文・弥生	散布地	39	大津城	中世	城館
18	天神原古墳群	古墳	古墳	40	落合西遺跡	弥生・古墳	集落
19	東川根Ⅱ古窯	中世	古窯	41	鳥羽美遺跡	弥生	集落
20	東川根Ⅲ古窯	中世	古窯	42	野田城	中世	城館
21	静居寺裏古窯	古代	古窯	43	田ノ谷遺跡	縄文・弥生・古墳	集落
22	大観音遺跡	近世	散布地	44	孤ヶ谷古窯	古代	古窯

杭列や石敷遺構などを検出しており、集落の存在が想定される。

志太地域北部の丘陵地帯では古代から複数の古窯跡が築かれており、相賀谷川上流の丘陵斜面に位置する相賀古窯（２）で山茶碗の生産が行われたと考えられているほか、伊太谷川下流左岸の谷奥には灰釉陶器から山茶碗期の窯跡である静居寺裏古窯（21）などが存在する。

伊太谷川と大津谷川に挟まれた丘陵南端部に分布する旗指古窯（27～29・31・34・35）では、平安時代から鎌倉時代にかけて灰釉陶器および山茶碗の生産が行われており、総数約50基におよぶ一大窯跡群を形成している。このうち、第１地点（27）では26～28号窯の３基、第２地点（28）では１号窯の１基、第４地点（29）では１・23～25号窯の４基、第８地点（35）では１・２号窯の２基の窯が調査されている。第６地点（31）は東より第Ⅰ区～第Ⅲ区に分かれており、第Ⅱ区１・２・22号窯、第Ⅲ区４～12・14・17～21号窯の計18基の窯が調査されている。第Ⅰ区15・16号窯は発掘調査されておらず詳細は不明であるが、山茶碗・甕等を焼成している。第７地点（34）では１基の窯跡の存在が想定されているが詳細は不明である。

このほか、山茶碗期に操業されたと思われる窯跡には静居寺前古窯Ｃ地点（23）・伊太口古窯（24）・蔵ヶ谷古窯（44）などがある。また、東川根上遺跡（９）・中村Ⅰ～Ⅲ遺跡（12・14・15）では山茶碗を採集しており、古窯跡である可能性が考えられる。

大津谷川上流の智満寺（４）は天台宗の古刹であり、本堂、本尊千手観音像などが国指定重要文化財になっている。境内より平安時代中期を中心とした灰釉陶器、山茶碗、丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦などが出土している。

第２章　確認調査

第１節　調査の体制

㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所では、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査事業にあたり、日本道路公団静岡建設局各工事事務所の管理に合わせ、工区を設定して調査にあたることとした。静岡工区（旧静岡市・旧岡部町・旧藤枝市・旧島田市）のうちの旧島田市域の現地調査は平成10～11年度、資料整理は平成22～24年度に実施しており、その体制は第２表のとおりである。遺跡の発掘調査は、現場に設置した現場事務所を拠点として、それぞれ現地調査を実施した。

第２節　確認調査の対象地点

１　位置と現況

第二東名の路線は、旧島田市域では大津谷川・伊太谷川流域から大井川左岸にかけての丘陵部を東西に横断しており、その距離はおよそ6.5㎞である。路線の大部分は丘陵部をトンネルとして通過するものであり、河川流域については高架橋により横断する。現況では、路線内の丘陵地の多くが山林または茶畑であり、河川流域のわずかな平坦部は水田、畑地、宅地などに利用されている。

２　対象地点の選定

第二東名の路線範囲において、静岡県教育委員会および島田市教育委員会が確認調査を必要とする対

第２表　旧島田市域の調査体制

			平成10年度	平成11年度	平成22年度
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所		所長	齋藤　忠	齋藤　忠	—
		所長兼常務理事	—	—	石田　彰
		副所長	—	山下　晃	—
	総務部	総務部長兼常務理事	伊藤友雄	伊藤友雄	—
		次長兼総務課長	—	—	松村　享
		総務課長	杉木敏雄	杉木敏雄	—
		経理専門員	稲葉保幸	稲葉保幸	—
		専門監兼事業係長	—	—	稲葉保幸
		総務係長	田中雅代	田中雅代	瀧　みやこ
		会計係長	杉田　智	大橋　薫	—
	調査研究部	調査研究部長	石垣英夫	佐藤達雄	—
		次長	—	佐野五十三	—
		次長心得	佐野五十三	—	—
		資料課長	—	大石　泉	—
		担当課長	足立順司	及川　司	中鉢賀治
		主任調査研究員	飯塚晴夫	飯塚晴夫	—
		係長	—	—	溝口彰啓
		調査研究員	蔵本俊明	中川律子 勝又直人 大林　元 稲垣聖二	—
		常勤嘱託員	—	—	—
静岡県埋蔵文化財センター	総務課	所長	勝田順也	勝田順也	勝田順也
		—	—	—	—
		—	—	—	—
		—	—	—	—
		次長兼総務課長	八木利眞	八木利眞	—
		—	—	—	—
		—	—	—	—
		主幹兼事業係長	村松弘文	前田雅人	—
		総務係長	瀧　みやこ	瀧　みやこ	—
		—	—	—	—
	調査課	調査課長	中鉢賀治	中鉢賀治	—
		—	—	—	—
		—	—	—	—
		—	—	—	—
		担当係長	富樫孝志	富樫孝志	—
		—	—	—	—
		—	—	—	—
		主査	—	—	—
		常勤嘱託員	五味奈々子	五味奈々子	—

象地点とその範囲を選定している。旧島田市域では、No.88地点～No.90地点の３箇所が対象地点として選定されている（第２図）。

３箇所の対象地点のうち、No.88地点は周知の遺跡である竹ノ尾遺跡の遺跡範囲と重複する。No.89・90地点は周知の遺跡を含まないが、遺跡の存否を含めて確認調査を行う必要があると判断された場所である。

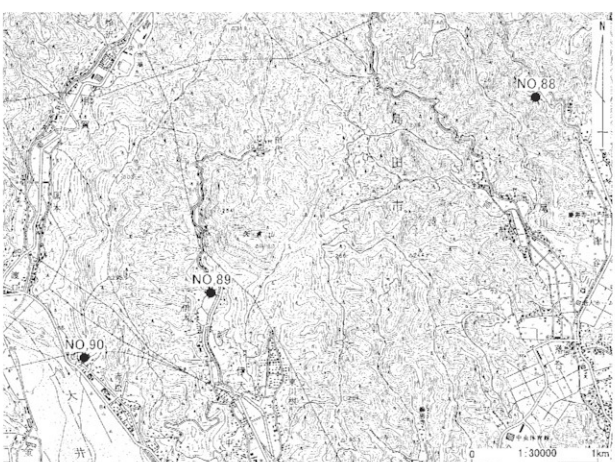
第３節　確認調査の方法と経過

１　調査の方法

確認調査は、いずれの地点でも対象範囲の一部を実際に掘り下げて遺跡の有無と範囲を把握した。まず、駐車場・作業員棟などの準備と並行して、対象地点の位置と範囲を確認した。その後、対象範囲内に調査区を設定した後、掘削を開始した。調査区はトレンチを基本とし、把握の難しい場合はその周囲を拡張した。掘削作業は、表土や撹乱土は重機を使用し、包含層掘削と遺構検出は人力で実施した。ただし、重機の進入が困難、あるいは作業に危険が伴う際は表土除去も人力で実施した。

土層については、特に遺物や遺構を発見した場所について、遺物包含層と遺構面の判断に重点を置いて、平面や調査区各壁の土層断面によって検討し、記録した。

発見した遺構については、遺構面・覆土・平面形を調査区内で把握し、記録した。遺構であるか、根



第２図　第二東名の路線と対象地点

第３表　調査実施期間

遺跡名	地点名	種別	平成10年度												平成11年度											
			4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
竹ノ尾遺跡	No.88	確認調査																					■			
上伊太遺跡	No.89	確認調査その１								■	■	■	■	■												
		確認調査その２																	■							
		本調査Ⅰ期														■	■	■	■	■						
		本調査Ⅱ期																				■	■	■		
—	No.90	確認調査							■	■																

痕や撹乱・自然地形等であるか判断できない場合は、実際に覆土を掘り下げるか、遺構全体を把握できるように部分的に調査区を拡張して判断に努めた。出土遺物については、位置と層位を確認・記録した後に取り上げた。以上の方法によって、遺構や遺物の確認と層位の把握を行い、遺跡の有無、さらに発見した遺跡の範囲について判断した。

現地の記録図面は、全体図は１／100～１／200、土層断面もしくは柱状図は１／20を基本とし、必要と判断した遺構図等は１／10～１／20で作成した。現地記録写真には35㎜判カラーネガを用いた。

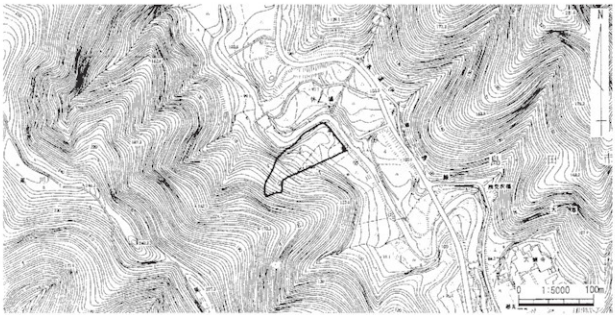
調査区の埋め戻しについては、各地点あるいはその部分の事情に合わせて行った。埋め戻し作業は、調査区の掘削と同様、一部を除き人力によって行った。

写真１　No.88地点　調査前状況

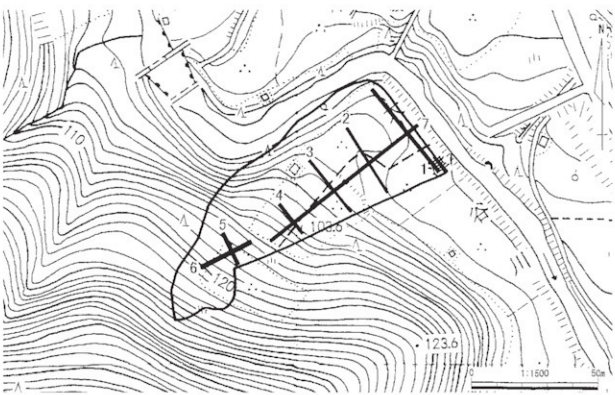
写真２　No.88地点　確認調査作業状況

写真３　No.90地点　28トレンチ完掘状況

写真４　No.90地点　29トレンチ完掘状況



第３図　No.88地点確認調査対象範囲



第４図　No.88地点確認調査トレンチ配置図

２　調査の経過

各地点の確認調査は、調査実施条件が整った地点について、道路公団から調査要請のあった順に着手した。そのため、調査の順序は地点順ではない。また、No.89地点については、道路建設工程の都合により２度に分けて確認調査を実施しており、それぞれ「確認調査その１」「確認調査その２」としている。各地点の調査期間は第３表のとおりである。

第４節　各地点の概要

１　No.88地点

⑴　位置と現況

No.88地点は島田市大草の大津谷川右岸の丘陵縁辺部に位置している（第３図）。千葉山（海抜496m）から流れ出た大津谷川は南東方向へ蛇行しながら丘陵裾部を開析し、下流の天徳寺（海抜80m）付近まで流れ下る。この天徳寺手前の大津谷川右岸の丘陵縁辺のわずかな平坦部に調査地点が位置しており、海抜は約95.８～120.０mである。島田市教育委員会の分布調査において縄文土器が採集されており、竹ノ尾遺跡として周知の遺跡とされていた。大津谷川上流に智満寺（第１図４）が存在し、遺跡からわずかに下った左岸からは中世の陶器が出土していることから、古代から中世の遺跡である可能性も指摘されていた。

⑵　調査の方法と経過

確認調査は平成11年12月から平成12年１月にかけて実施しており、調査対象面積は4,430㎡、実掘面積は250㎡である。斜面に沿って南西―北東方向のトレンチ（６・７トレンチ）を設定し、これに直交する方向に１トレンチから５トレンチを設定して調査した（第４図）。表土除去は重機により、それ以下は人力により掘削を行った。各トレンチの実測図を作成した後、重機によりトレンチの埋め戻しを実施した。

⑶　結　果

調査地点では耕作土の直下で地山を検出しており、過去に茶畑を拡張するため、雑木林を大きく造成し、撹乱が生じていることが判明した。また、場所によっては山の崩落土と思われる破砕礫を主体とした層が確認された。いずれのトレンチでも遺構や遺物は発見されず、本調査の必要はないと判断した。

第５図　No.89地点確認調査対象範囲

第６図　No.89地点確認調査トレンチ配置図

２　No.89地点

⑴　位置と現況

No.89地点は、島田市伊太の伊太谷川右岸の西からのびる丘陵とその裾野部分に位置している（第５図）。丘陵部は竹林、裾野部分は住宅・畑・梅林・水田として利用されていた。丘陵の頂部には古墳の存在が、斜面地には中近世の墓地の存在が想定され、現在水田となっている丘陵周辺の平坦地には鎌倉時代の水田跡が存在する可能性が想定された。

⑵　調査の方法と経過

確認調査その１

平成10年11月～平成11年３月に、丘陵南西側斜面（１～３トレンチ）、畑部分（４～７トレンチ）、東水田部（８～14トレンチ）、西水田部（15～24トレンチ）の調査を実施した（第６図）。調査対象面積は11,499㎡、実掘面積は542㎡である。東水田部・西水田部については人力掘削の前に重機による表土除去を行い、丘陵南西側斜面と畑部分については、重機の進入が不可能なため、人力による掘削を実施した。トレンチ内の調査の状況により、適宜トレンチを拡張・追加設定し、それらには枝番号を付け、調査を

行った。

調査の結果、丘陵南西側斜面（１～３トレンチ）では、厚さ約20㎝の表土直下で明黄褐色の地山が検出され、遺構・遺物は確認できなかった。畑部分（４～７トレンチ）では、上から順にⅠ層（耕作土層）、Ⅱ層（にぶい黄褐色土層）、Ⅲ層（黄褐色土層）、Ⅳ層（黒褐色土層）、Ⅴ層（オリーブ褐色土層）、Ⅵ層（黄褐色土層）、Ⅶ層（灰色粘土層）、Ⅷ層（にぶい黄橙色粘土層）、地山（明黄褐色土）の堆積が確認された。このうち、Ⅱ～Ⅴ層・Ⅶ層で中世の遺物が出土している。遺構はⅤ層の上面・下面の２面で溝・土坑・ピット・石列などが検出された。

東水田部（８～14トレンチ）では、上から順にⅠ層（耕作土層）、Ⅱ層（オリーブ黒色粘土層）、Ⅲ層（灰色粘土層）、Ⅳ層（暗青灰色粘土層）、Ⅴ層（暗緑灰色粘土層）、Ⅵ層（緑灰色粘土層）の堆積が確認された。このうち、Ⅱ層・Ⅲ層で中世の遺物が出土したが、遺物の量は現伊太谷川の流路付近（10・13トレンチ）へ近づくほど少なくなっている。また、Ⅲ層で杭列を検出したが、平面・断面ともに土層の変化を観察することはできなかった。Ⅴ層は弥生時代の遺物包含層であり、遺物は14トレンチ付近で多く出土した。遺構は９トレンチから14トレンチにかけて中世の杭列を検出し、11－２トレンチ・13－２トレンチ・14－１トレンチで弥生時代の溝や土坑を検出した。

西水田部（15～24トレンチ）では、上から順にⅠ層（耕作土層）、Ⅱ層（灰色粘土層）、Ⅲ層（オリーブ灰色粘土層）、Ⅳ層（暗オリーブ色粘土層）、Ⅴ層（暗青灰礫層）の堆積が確認された。Ⅱ層・Ⅳ層より中世の土器が出土したが、遺構は検出されなかった。

確認調査その２

平成11年８月に実施しており、調査対象面積は2,263.5㎡、実掘面積は48㎡である。丘陵頂部の平坦面には十文字のトレンチ（A・Bトレンチ）、西側斜面には等高線に直交するトレンチ（Cトレンチ）を設定した。調査地点は重機の進入が不可能なため、人力による掘削を実施した。

丘陵頂部（A・Bトレンチ）では、厚さ約35㎝の表土直下で明黄褐色の地山を検出している。Aトレンチ西半部で長軸約1.3m、短軸約60㎝、深さ約25㎝の土坑状遺構１基を検出し、陶磁器片・かわらけ片等が出土した。また、Aトレンチ西端部の表土中より銅銭が２点出土している。Bトレンチ南半部でも同様の土坑状遺構を確認したが、遺物は出土しなかった。丘陵西側斜面（Cトレンチ）では、トレンチ西側でオリーブ褐色土～黄褐色土が厚く堆積していたが、遺構・遺物は確認されなかった。

⑶　結　果

調査対象地点の丘陵周辺の平坦地に中世の遺跡の広がりが確認され、東水田部では杭列が検出されたことから、中世の水田が広がっているものと考えられた。また、東水田部の南側では弥生時代の遺構・遺物が確認され、集落が存在する可能性が考えられた。

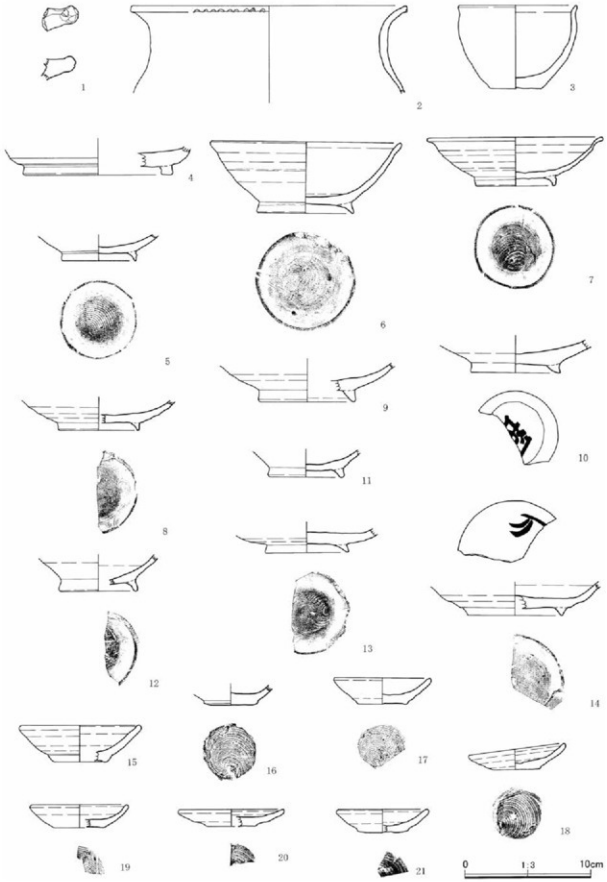
今回の確認調査の結果、遺跡の広がりが明らかになった範囲を上伊太遺跡として埋蔵文化財包蔵地の登録を行い、第二東名高速道路の橋脚と側道が建設される範囲について本調査を実施することとなった。

⑷　確認調査出土遺物

土器（第７図１～第８図38）

１は土師器である。時期や器種は不明であるが、ミニチュアの甑の可能性がある。２は台付甕の口縁部である。風化のため内外面の調整は不明であるが、口唇部に刻みを施しており、弥生時代後期に属すると思われる。３は鉢である。風化のため内外面の調整は不明であるが、古墳時代前期に属すると思われる。４は須恵器の坏身で、貼り付け高台の底面にヘラ削りとナデを施している。８世紀中葉の助宗窯産の製品と思われる。

５～８・12は灰釉陶器の碗である。５は高台内に糸切り痕を残し、高台の接合部を削っている。６は底部の糸切り痕が一部に残り、口縁部の灰釉が発色している。７は底部の糸切り痕を残し、高台内部と



第７図　No.89地点確認調査出土土器１

胴部外面に黒く炭化物が付着している。内面と外面の一部に灰釉を付けているが発色していない。８は高台部を入念に作り、底部の糸切り痕をナデ消している。12は底部の糸切り痕が部分的に残っており、一部に灰釉の痕跡が残存する。５・７・８・12は旗指古窯６－Ⅲ－７・８号窯期併行（折戸53号窯式併行）の10世紀初頭の製品、６は旗指古窯14号窯期（東山72号窯式併行）の10世紀後葉の製品と思われる。

９～11・13～23は東遠系の山茶碗で、９～11・13・14は碗である。９は底部外面に糸切り痕が一部残り、内面に灰釉が付着している。10は高台端部にスノコ状の圧痕が残り、底部の糸切り痕をナデている。底部外面に墨書があるが、文字の判読が不可能である。11は底部の糸切り痕を残している。13は底部の糸切り痕を一部消しているが残している。14は底部の糸切り痕が残り、高台部にスノコ状の圧痕が残る。内面に二文字の墨書があり、一字目は「万」と読める。15は小碗で、低い高台が貼り付けられる。16～23は小皿であり、底部の糸切り痕を残している。16は内面に墨痕が残っており、転用硯として使用した可能性がある。18は内面底部の中心に円形の窪みがある。20は口縁の一部に灰釉が付く。９・10はⅠ－２期の12世紀中葉の製品、13・15～17・21はⅡ－１期の12世紀後葉の製品、23はⅡ－２期の12世紀末葉の製品、18はⅡ－２期からⅢ－１期の12世紀末葉～13世紀前半の製品、14・20・22はⅢ－１期の13世紀前半の製品、19はⅢ－１期からⅢ－２期の13世紀前半から13世紀中葉の製品と思われる。

24は用途不明の土製の道物であり、側面を入念に研磨している。文字状の線刻が彫り込まれており、一部に朱痕が残っている点から印章の可能性もある。

25・28はかわらけで、25は中世後半の製品と思われる。28は底部に糸切り痕を残し、内面に墨痕が残る。江戸時代の製品である。

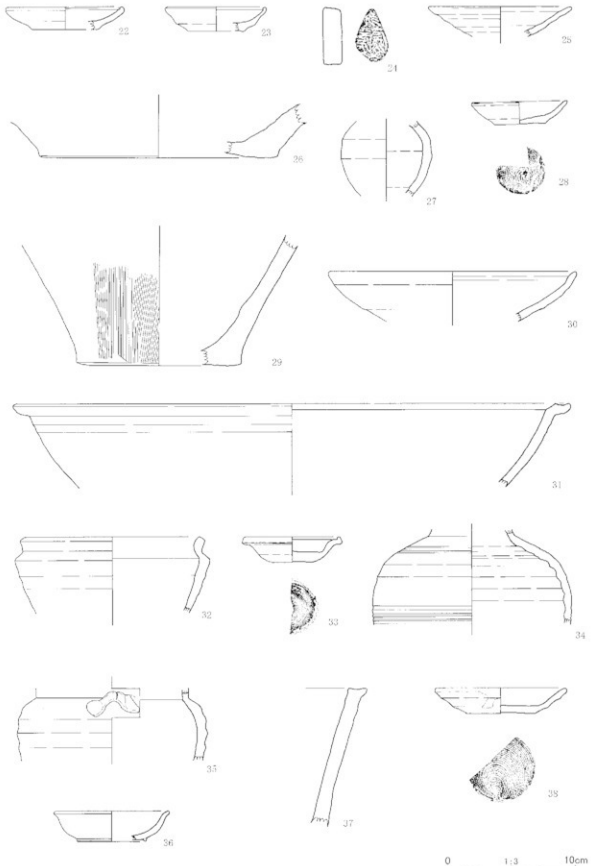
26・27・29～38は陶器で、27・30～35は古瀬戸製品である。27は仏花瓶で、後Ⅰ・Ⅱ期の14世紀末から15世紀初頭の製品である。30は平碗で、後Ⅲ期の15世紀前半の製品である。31は折縁深皿で、後Ⅱ期の15世紀頃の製品である。32は大型筒型容器で、後Ⅱ～Ⅲ期の15世紀頃の製品である。33は折縁小皿で、後Ⅲ期の15世紀前半頃の製品である。34は瓶子で頸部と胴部に４本単位の沈線を付けている。後Ⅲ期～Ⅳ期古段階の15世紀前半の製品である。35は口広有耳壺で、後Ⅲ～Ⅳ期古段階の15世紀前半の製品である。36は小碗で、高台が付いているが時期は不明である。

26・29・37は常滑産の製品である。26・29は甕底部であり、中世の製品である。37は片口で、15世紀後半の製品である。38は志戸呂産の鉄釉皿で、底部の糸切り痕を残している。17世紀の製品である。

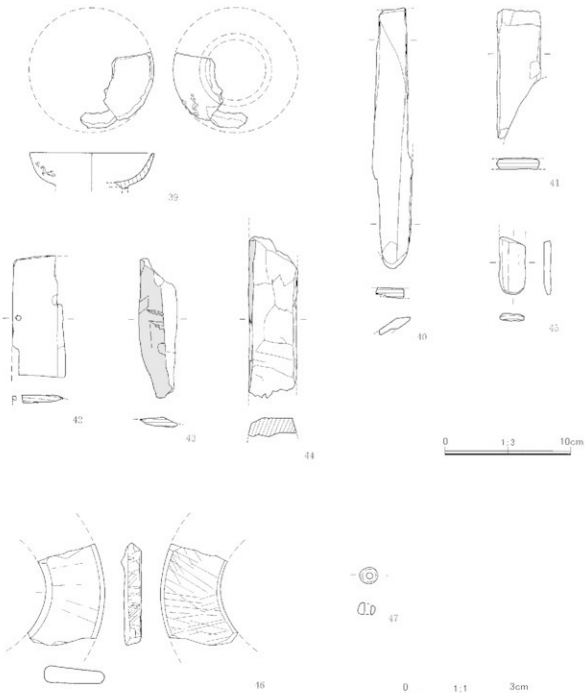
木製品（第９図39～45）

39はケヤキ製の漆椀であり、木取りは横木取り柾目である。口縁の一部が残存しており、高台部は欠損している。黒漆塗りの上に赤漆を塗っており、赤漆が剥離している。底部には黒漆の一部が残存している。外面の一部に文様のような痕跡が残る。

40～45は用途不明の木製品であり、40～42・44・45はヒノキ製、43はカヤ製である。40は上端部を斜めに加工し、下端部を丸く加工している。下端部は炭化している。裏面を欠損しており、下部が歪んでいる。41は上端部を斜めに加工し、下部にも加工を施している。42は裏面を欠損しており、表面中央左側に直径約５㎜の孔が開けられている。43は表面に加工痕が見られ、３分の２程度が炭化している。裏面は欠損している。44は表面に加工痕が残り、上下端部および裏面を欠損している。左側面は炭化している。45は下端を丸く加工している。木取りは40～43・45が板目、44が斜め柾目である。



第８図　No.89地点確認調査出土土器２



第９図　No.89地点確認調査出土木製品・石製品・玉類

石製品・玉類（第９図46・47）

46は環状石製品である。両面に研磨による工具痕が残り、外縁には刻目が付けられる。石質は細粒砂岩である。47は直径約4.5㎜のガラス小玉である。

金属製品（第38図148）

148は鉄砲玉であり、直径約1.6㎝、重量約14.7ｇである。

銭貨（第39図155・156）

155・156は寛永通寶であり、２枚が重なった状態で出土している。155は新寛永銭、156は古寛永銭で

ある。155は「寛」の字の左上が一部欠損している。

３　No.90地点

⑴　位置と現況

No.90地点は島田市相賀の大井川左岸から北東方向に伸びた丘陵の南側斜面に位置しており、海抜は約100～105ｍである（第10図）。調査前には、丘陵部が雑木林や竹林、南側斜面が宅地として利用されていた。大井川沿いの約1.2㎞下流に位置する大鳥遺跡（第１図17）は旧石器・縄文時代の遺跡であり、No.90地点も地形が似ている点から旧石器や縄文時代の遺構・遺物が存在する可能性が考えられた。また、南東側斜面裾部には宅地跡が存在しており、中近世の屋敷地である可能性が考えられた。

⑵　調査の方法と経過

確認調査は平成10年10月から11月にかけて実施している。確認調査対象地は西・中央・東の３地区に分かれており、調査対象面積は8,830㎡、実掘面積は471㎡である。現状のほとんどが山林であり、立木が伐採されていないため、立木の間をぬった丘陵の尾根部、平坦面に33箇所のトレンチを設定した（第11図）。トレンチは人力により掘削し、東区の一部については重機による掘削を実施した。層位は場所により違いが見られ、厚さ20～60㎝程度の表土の下に暗褐色～黄褐色土が堆積していた。

西区では旧石器・縄文時代の遺跡が存在する可能性を考え、平坦面及び尾根上に１～３・５トレンチを設定した。その結果、平坦面は谷が埋没したものであることが判明し、地山まで２ｍ以上掘削したが遺物・遺構は発見できなかった。また、尾根上では表土から25㎝程度で地山が検出されたが、遺構・遺物は発見できなかった。

中央区についても旧石器・縄文時代の遺跡が存在する可能性を考え、平坦面および尾根上に４・６～16トレンチを設定した。西区と同様、平坦面は谷の埋没であることが判明し、尾根上においても遺構・遺物は発見できなかった。

東区については、尾根上では旧石器・縄文時代の遺跡が存在する可能性を考え、南東側斜面下の宅地跡は中近世の屋敷地の可能性を考えてトレンチを設定した（17～33トレンチ）。尾根上では遺構・遺物ともに発見されず、南東側の斜面下に存在する宅地跡は、幕末から明治期の造成と考えられ、中近世の屋敷ではないと判断された。

⑶　結　果

今回の調査では、いずれのトレンチも遺構や遺物は検出されず、本調査の必要はないと判断した。

第10図　No.90地点確認調査対象範囲

第11図　No.90地点確認調査トレンチ配置図

第３章　本調査

第１節　発掘調査の方法と経過

１　発掘調査の方法

前章に記した通り、No.89地点については、確認調査で遺構・遺物の存在が確認されたため、上伊太遺跡として本調査を実施することになった。本調査は第二東名高速道路の側道部の調査（本調査Ⅰ期：１～３区）と橋脚部の調査（本調査Ⅱ期：４・５区）に分けて実施した（第12図）。

本調査の方法としては、表土除去は重機掘削で行い、遺構検出・遺構掘削は人力で実施した。調査における測量及び遺物取り上げを正確かつ円滑に行うために、調査区内には国土座標に基づいた10m方眼のグリッドを設定した（第13図）。グリッドは東西方向に西から１、２、３、南北方向に南からA、B、Cと記号を付している。

現地の記録図面は１／10～１／20縮尺で作成し、遺構完掘状況測量及び図化作業の一部を空中写真測量により行った。写真撮影は、35㎜判モノクロ・カラーネガ、６×７判モノクロネガを使用した。

２　発掘調査の経過

⑴　本調査Ⅰ期

平成11年５月６日から９月28日まで実施しており、発掘面積は1,083.8㎡である。

１区の調査　５月12日から重機による表土除去を開始し、５月31日からは人力による包含層の掘削を行った。６月前半に第１遺構面を検出し、近世の杭列が確認され、６月11日に写真測量を行った。６月18日から重機による中間層の除去を実施し、調査区南西側で第２遺構面を検出した。８月前半に空中写真撮影および土層断面の測量を行い、８月17日までに重機による埋め戻しを実施して調査を終了した。

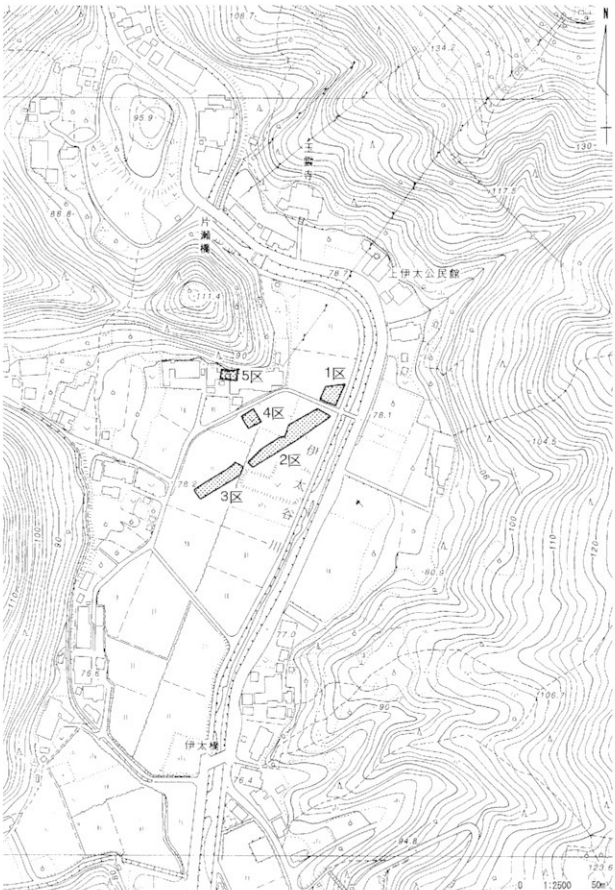
２区の調査　６月11日から重機による表土除去を開始した。６月16日から第１面の遺構検出を行い、中世～近世の杭列を検出した。７月７日に第１面の写真測量を実施し、７月15日から重機による中間層の除去を開始した。調査区東半部で第２面の遺構検出を行い、弥生時代後期～古墳時代前期の溝状遺構・小穴などが確認された。７月30日から第２面の遺構掘削を開始し、８月６日に空中写真撮影および測量を実施した。８月後半から遺構平面図、遺物出土状況の作成、土層断面図の測量、写真撮影を行った。９月28日に重機による埋め戻しを実施して調査を終了した。

３区の調査　５月６日から重機による表土除去を実施した後、人力による遺構検出を行い、中世の杭列を検出した。５月26日に空中写真撮影および測量を実施し、重機による埋め戻しを行って６月10日に調査を終了した。

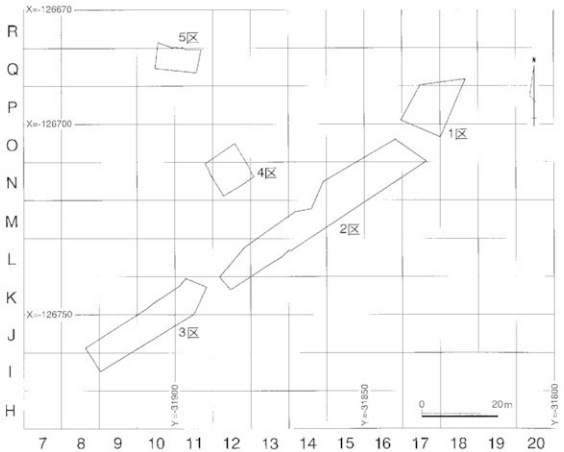
⑵　本調査Ⅱ期

平成11年11月９日から平成12年１月10日まで実施した。発掘面積は308㎡である。

４区の調査　11月９日から重機による表土除去を開始した。11月16日から第１遺構面の杭列を検出し、実測、写真撮影を実施した。18日に第１遺構面の実測を完了し、19日に重機による掘削で第２遺構面を検出した後、人力による精査を実施し、実測および遺物取り上げを行った。12月１日に重機による中間層の除去を実施し、弥生～古墳時代の包含層に相当する面まで掘削したが、該当する遺構や遺物は確認できなかった。12月21日に埋め戻しを実施して調査を終了した。



第12図　周辺地形と本調査区



第13図　グリッド配置図

５区の調査　12月１日から重機による表土除去を開始した。12月６日から人力による精査を行い、中世の石敷遺構・石組遺構・小穴を検出した。土層断面図作成、平面図作成、写真撮影を実施した後、１月10日に重機により埋め戻して調査を終了した。

第２節　資料整理の方法と経過

第二東名建設に伴う発掘調査については現地調査を優先するという方針から、資料整理は各工区における現地調査が終了する段階から実施することになった。資料整理の前段階として基礎整理作業、すなわち出土遺物の洗浄・注記、写真整理、図面整理、各種台帳作成といった作業を逐次進め、本格的な資料整理作業に備えた。

上伊太遺跡の資料整理及び報告書作成作業は平成23年１月より財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所中原整理事務所で実施し、平成23年４月からは、静岡県埋蔵文化財センター中原事務所で業務を引き継いだ。出土遺物は分類・仕分け・接合・復原作業を経て実測・版組・トレース・観察表作成・遺物写真撮影を実施した。これらの作業と並行して報告書の執筆と編集作業を進めた。出土遺物及び図面・写真等の記録類は上記作業終了後、台帳を作成した上で収納した。なお、木製品の樹種同定および保存処理は当センター保存処理室で実施しており、プレパラートは静岡県教育委員会（静岡県埋蔵文化財センター）で保管している。

第４章　上伊太遺跡の調査成果

第１節　概要

１　地　形

上伊太遺跡は伊太谷川右岸の丘陵に面した平野部に立地している。伊太谷川により開析された谷がやや開けたところであり、土砂の堆積により後背湿地の発達した平坦面を形成している。現地表面は標高76～78m程度であり、伊太谷川の流路に沿った南方向に緩やかに傾斜している。現況では、平坦部の多くが水田として利用され、丘陵裾部が宅地、茶畑、梅園などになっていた。

２　土　層

⑴　１区の土層（第14図Ａ－Ａ'断面）

１区では、１層の灰色粘土層から６層の褐灰色粘土層までがほぼ水平に堆積している。このうち２・３層が近世の遺物包含層であり、３層上面で近世の遺構面（第１遺構面）を検出している。４～10層は自然堆積層である。

弥生時代後期～古墳時代前期の包含層は、調査区の南西隅で一部が確認でき（11層）、弥生土器または古式土師器の小片が出土している。この11層が２区の８層（第14図Ｂ－Ｂ'断面）に相当する。第２遺構面に相当する面は調査区の南西隅でわずかに検出されたが（12層上面）、北東方向に大きく落ち込んでおり、その上に河川堆積と思われる砂礫層（８層）が厚く堆積していた。この砂礫層では、遺構・遺物は全く確認できなかった。

⑵　２区の土層（第14図Ｂ－Ｂ'断面）

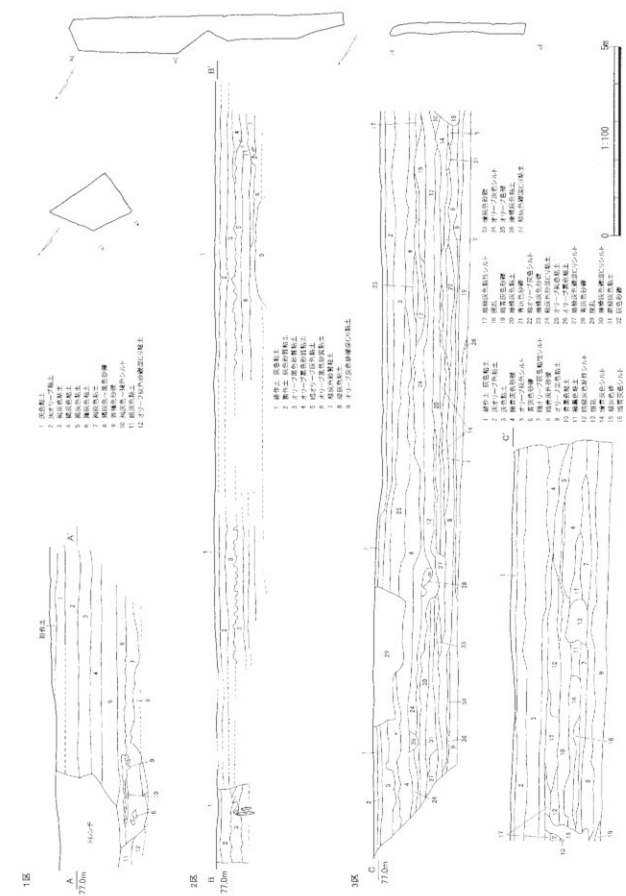
２区では遺構面を２面検出しており、第１遺構面が中世後半から近世、第２遺構面が弥生時代後期から古墳時代前期に属すると考えられる。東半部（Ｂ－Ｂ'断面）では１層の耕作土から６層のオリーブ黒色砂質粘土層までほぼ水平に堆積しており、第１遺構面は５層上面で検出している。

８層が弥生時代後期～古墳時代前期の遺物包含層であり、第２遺構面は８層下面で検出している。遺構面は現伊太谷川が流れる南西方向に緩やかに傾斜しており、２区中央部のN15グリッド南西からM15グリッド北西にかけて高低差1.0～1.5m程度の急激な落ち込みが観察された（第20図）。この落ち込みの底部では蛇紋岩礫がかたまって検出されたため、これより西側の遺構面の検出は実施していない。

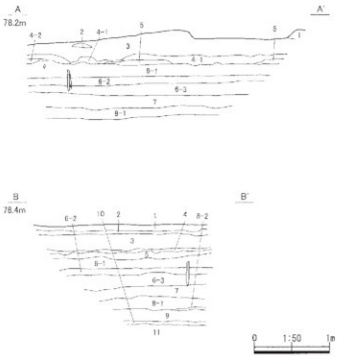
２区西半部では、L13～M13グリッド内の約５m四方の範囲を重機により掘削し、土層の確認を行った。上層では２区東半部１～６層とほぼ同じ層が確認されたが、６層より下層では炭酸鉄のブロックを含むオリーブ黒色砂質粘土層が堆積し、その下層に暗緑灰色砂礫層が10㎝程度堆積していた。砂礫層より下層では、灰色粘土層が１m程度堆積していた。２区東半部で検出された第２遺構面と同じ遺構面は確認できなかった。

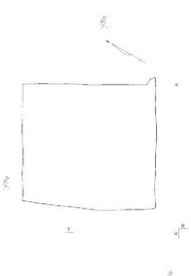
⑶　３区の土層（第14図Ｃ－Ｃ'断面）

３区では、１層の耕作土から３層の灰色粘土層までほぼ水平な堆積を示しているが、４層以下では東方向へわずかに傾斜している。20層から８層にかけて山茶碗が出土しており、中世の遺物包含層と考えられる。第１遺構面の杭列は８層下面で検出しており、遺構面は東に向かって緩やかに下がっている。弥生～古墳時代の明確な遺構面は確認されていない。



第14図　１～３区土層断面図





第15図　４区土層断面図

⑷　４区の土層（第15図）

４区は１層の暗褐色土層から11層の灰色粘土層までがほぼ水平に堆積している。このうち１・２層が現耕作土の畑地、３層が水田から畑への造成時の盛土、４・５層が明治～昭和期の水田と考えられる。中世の杭列は第１遺構面（６－１層）・第２遺構面（６－２層）で確認されており、これらの遺構面には20㎝程度の高低差が存在する。７層および９層で砂礫層が確認されているが、これらの砂礫層に挟まれた８層からは流木等が出土している。弥生～古墳時代の遺構面および遺物包含層は確認されなかった。

⑸　５区の土層（第34図）

５区では１層の表土から10層のオリーブ黒砂質土の堆積が確認されており、調査区の北側が丘陵部に

隣接しているため、土層堆積は南に向かって傾斜している。このうち３層が中世～江戸時代初期の遺物包含層、５・６層が鎌倉時代の遺物包含層と考えられ、６層上位で鎌倉時代の遺構面を検出している。この遺構面を検出した段階で、調査区の北半分で岩盤が露出しており、これ以上掘り下げての調査は、さらに岩盤の比率が高くなり、遺構・遺物を含む層が狭くなることが予想された。また、安全上支障があると考えられたので、この面にて調査を終了している。

３　遺構・遺物の概要

遺構面は２面検出している。第１遺構面は調査区全体で検出されており（第16図）、１～４区では中世～近世の杭列を検出している。また、５区では中世に属すると思われる石敷遺構・石組遺構を検出している。包含層からは、灰釉陶器・山茶碗・陶磁器等の土器、漆椀・曲物等の木製品、鉄鏃玉・キセル・銅銭等の金属製品が出土している。

第２遺構面は２区東半部で検出しており（第20図）、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居２軒、掘立柱建物２棟、溝状遺構８基、小穴69基を検出している。竪穴住居跡（SH01）からは弥生時代後期と思われる壺（第27図55）が出土しているが、包含層から出土した土器の所属時期には弥生時代後期から古墳時代前期までの時期幅が確認できる。出土した石器には、乳棒状磨製石斧、蔽石、磨石などがある。

第２節　調査成果

１　１区の遺構と遺物

⑴　１区検出遺構

SA01（第16図）

１区南西部のP17・O17・O18グリッドで検出した杭列である。北西―南東方向に延びており、検出された杭列の長さは約8.7mである。検出された杭の数は計26本で、杭の材質の内訳は、針葉樹芯材７本、針葉樹割材16本、針葉樹枝材１本、広葉樹芯材２本である。中央部の杭列は堰状を呈しており、人頭大の石が隙間無く詰められ、その石組の周囲に杭が斜方向に打ち込まれていた（写真図版３－４）。

１区では、３層より17世紀代の陶器片および寛永通寶３点が出土している。したがって、３層中に打ち込まれたSA01の所属時期についても近世以降である可能性が高い。

⑵　１区出土遺物

土器（第17図48～54）

48～54は陶器であり、48～50・52～54は志戸呂産の製品である。48は鉄釉天目茶碗で、17世紀中頃の製品と思われる。49は灰釉小坏で17世紀後半の製品であろう。50は鉄釉皿である。底部の糸切り痕を消しており、内面に重ね焼き痕が残る。17世紀の製品と思われる。52～54は擂鉢で、52・53は18世紀、54は17世紀の製品と思われる。

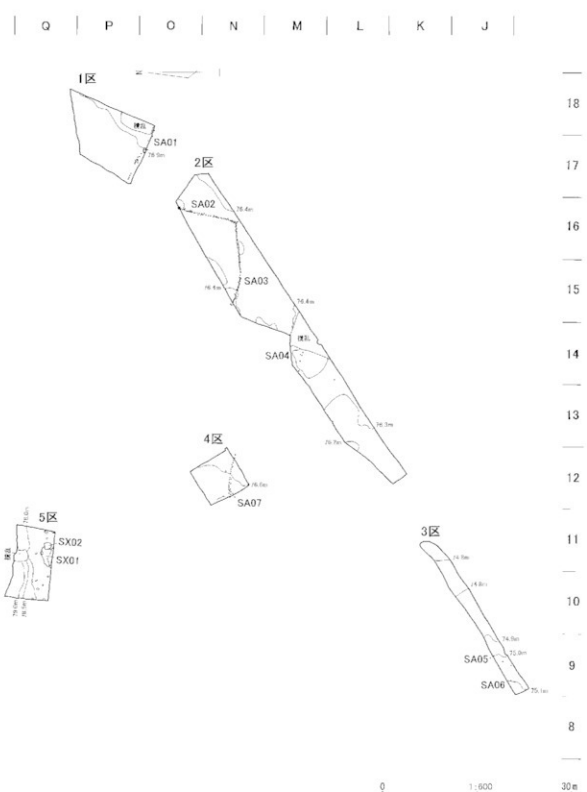
51は瀬戸・美濃産の志野丸皿で、登窯第３・４小期にあたる17世紀後半頃の製品である。

金属製品（第38図149）

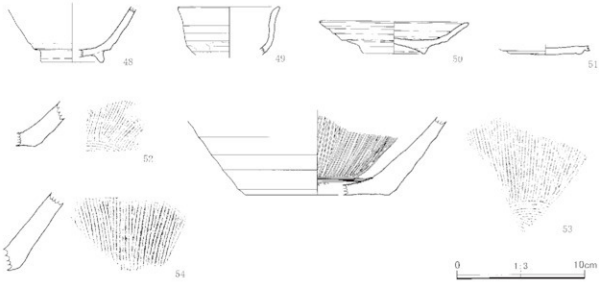
149はキセルの雁首であり、火皿の内部に土砂がつまった状態で出土している。

銭貨（第39図154・157・158）

154・157・158は寛永通寶であり、154は文銭、157・158は新寛永銭である。



第16図　第１面遺構全体図



第17図　１区出土土器

２　２区の遺構と遺物

⑴　２区第１面検出遺構

２区第１面は、北東から南西に向かってやや低くなる傾斜を持ち、調査区中央部（M14グリッド南東部）では、瓦用の粘土の採土による撹乱が生じていた。２区東側で中世（鎌倉～室町時代）に属すると思われる杭列（SA02・03）を検出し、中央部ではSA04を検出した。

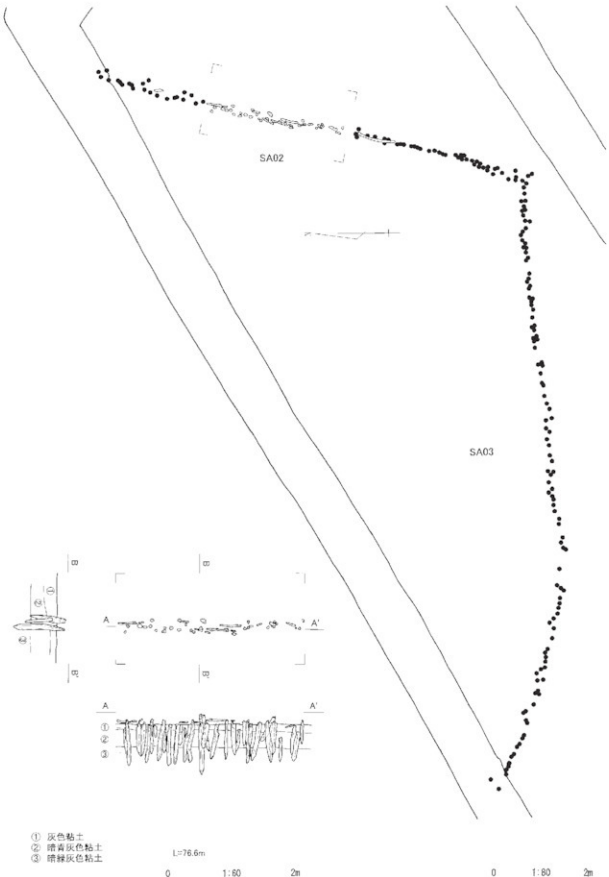
SA02・03（第16・18図）

L字状を呈する杭列である。O16グリッド南東部からN16グリッド北東部にかけて北北西―南南東方向へ伸び（SA02）、N16グリッド南東部で約120°屈曲して西側へと続き（SA03）、SA02・03の接合部より約8.5m西側で北に約20°屈曲する。杭列は２列が並列しており、その列間に横板が部分的に認められる。これらの杭列を構成するほぼ全ての杭の頭部が黒く焦げているが、杭の先端は焼けていない。中には杭頭から尖端まで焼けている杭もあるが、これらは全て短い杭である。これは水田の水面から上に出る部分が腐朽しやすいため、この部分の腐食を防ぐために故意に焼いたものと考えられる。

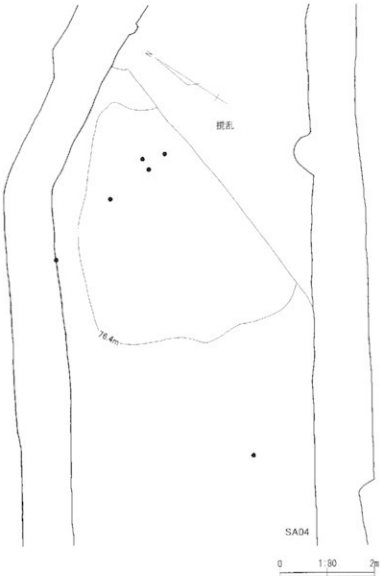
杭の材質は全て広葉樹であり、芯材・割材・枝材がある。芯材には樹皮が付いたままのものが多く、径５㎝前後の小ぶりのものがほとんどを占める。割材には丸材を半截したものや、１／３～１／６に割ったものがあり、割材に用いられたもとの材は、径10㎝以上の太い丸材であったと推定される。杭の先端加工には、全周を削りながら４～６面の切削面を作り出して尖らせているものと、１～２面のみの切削面をもって、片面のみから削っているものとに大別でき、切削加工のこのような相違は、杭の材質の相違とは相関しない。

SA02の検出された長さは約9.2mであり、杭列に密接する長さ40～90㎝の横板が大きく３箇所に認められる。SA03の検出された長さは約12.54mであり、西側の屈曲部付近の杭列内から15世紀後半の甕の口縁部（第29図78）が出土している。

遺構面を検出した段階で、L字に囲まれた杭列の内側では暗青灰色粘土層（第18図②層）、外側では灰色粘土層（第18図①層）を検出しており、内側の水田を保護した杭列である可能性が考えられる。出土遺物より、これらの杭列の所属時期は中世後半（14～15世紀頃）以降と考えられる。



第18図　SA02・03平面図・断面図



第19図　SA04平面図

SA04（第16・19図）

M14グリッド中央部で検出した６本の杭であり、杭の材質の内訳は広葉樹芯材５本、針葉樹割材１本である。杭の太さに統一性がなく、全く異なる材質の杭が１本含まれていることから、互いの関連性は希薄である。６本の杭はいずれもSA02・03の杭よりも短く、杭頭の焼けた部分が失われていることから、SA04の杭列は後世に一部削平を受けている可能性が考えられる。

⑵　２区第２面検出遺構

SH01（第20・21図）

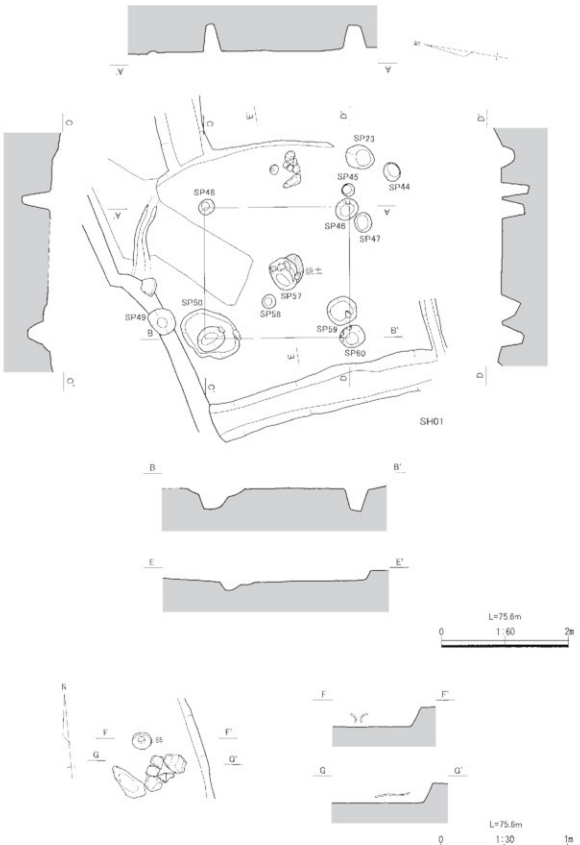
N15グリッド東部で検出した竪穴住居跡である。住居の規模や形状は不明であるが、北東側で壁溝が弧を描いており、その形状から楕円形の住居跡であった可能性が高い。壁溝の検出幅は18～27㎝、検出された深さは３～５㎝である。床面は検出されていない。

主柱穴は４基検出されており（SP46・48・50・60）、主柱穴の柱間は2.3m×2.1m、主軸方向はN－18°－Wである。柱穴の平面形はいずれも楕円形であり、SP46は長径約36㎝、短径約33㎝、深さ約30㎝、SP48は長径約24㎝、短径約24㎝、深さ約45㎝、SP60は長径約39㎝、短径約36㎝、深さ約35㎝である。SP50は長径約1.0m、短径約75㎝、深さ約９㎝であり、中央部で長径約45㎝、短径約39㎝、深さ約26㎝の楕円形に掘り込まれている。

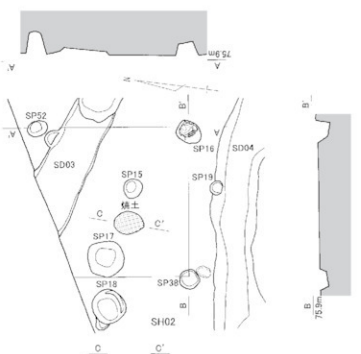
住居内の中央やや南寄りには焼土が堆積しており、炉跡と考えられる。焼土は径約45㎝の楕円形に堆積しており、焼土の北西側に長径約54㎝、短径約42㎝、深さ約13㎝の楕円形の小穴（SP57）が接している。

住居の覆土から弥生時代後期の壺（第27図55）が出土している。出土遺物および遺構の形状から、住居の所属時期は弥生時代後期と考えられる。

第20図　２区第２面遺構全体図



第21図　SH01平面図・断面図



第22図　SH02平面図・断面図

SH02（第20・22図）

O16グリッド南西部からN16グリッド北西部で検出している。３基の小穴（SP16・38・52）によって方形に囲まれた部分の中央南西寄りで焼土が検出されているため、整理作業時にこの焼土を炉跡と考え、竪穴住居跡として扱うこととした。壁溝が検出されておらず、住居の平面形は不明である。

主柱穴の柱間は2.4ｍ×2.3ｍ、主軸方向はＮ－22°－Ｗであり、主柱穴のうちの１基が調査区外に存在したものと考えられる。SP16は平面形が不定形で長径約39㎝、短径約33㎝、深さ約23㎝、SP38は平面形が不定形で長径約34㎝、短径約30㎝、深さ約15㎝、SP52は平面形が楕円形で長径約32㎝、短径約24㎝、深さ約34㎝である。

焼土は長径約46㎝、短径約35㎝の楕円形に堆積している。検出面から５～７㎝程度の深さで土が焼けているが、炭化物はほとんど見られず、被熱により変色している程度である。検出面付近では濃く赤化していたが、下面ほど判別が不可能となった。

SP16から土器片が出土しているが、細片のため図示できなかった。主柱穴の主軸方向がSH01に近似しており、SH01とほぼ同時期に属する可能性がある。

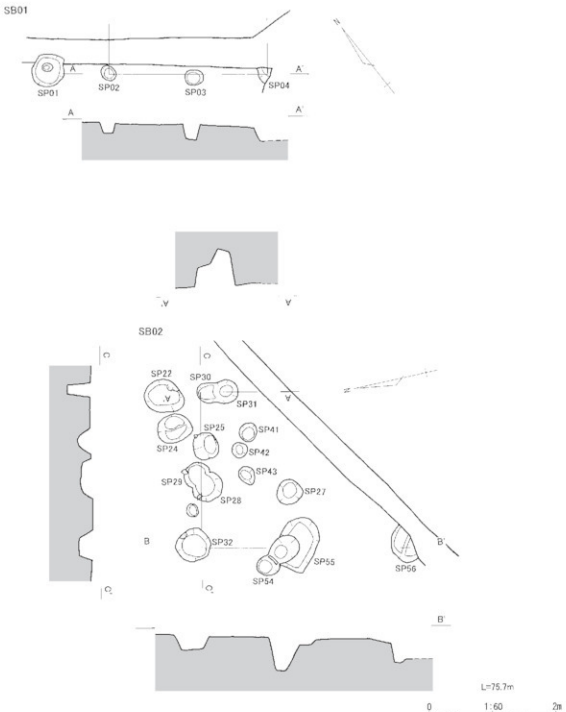
SB01（第20・23図）

調査区北東隅のO16グリッド南東部からO17グリッド南西部にかけて検出した掘立柱建物跡である。３基の柱穴（SP02・03・04）が並列しており、柱穴が並ぶ方向はＮ－35°－Ｗである。建物は調査区外まで広がると思われるため、規模は不明である。SP02とSP03の柱間は約1.3ｍ、SP03とSP04の柱間が約1.2ｍである。SP02は平面形が楕円形で長径約28㎝、短径約22㎝、深さ約18㎝、SP03は平面形が楕円形で長径約30㎝、短径約26㎝、深さ約26㎝である。SP04は調査区北東隅で遺構の一部のみを検出したため平面形および規模は不明であり、深さは約20㎝である。SP03・04から土器片が出土しているが、細片のため図示できなかった。

SB02（第20・23図）

N16グリッド西部で検出した掘立柱建物跡である。調査区内で５基の柱穴（SP29・30・32・55・56）を検出しており、桁行２間（約2.5ｍ）、梁行２間（約3.2ｍ）以上の側柱建物であったと推測される。建物の主軸方向はＮ－45°－Ｗであり、南側は調査区外のため未検出である。

柱穴の平面形は、SP29・30・32が円形、SP56が楕円形、SP55が不定形である。SP29は直径約45㎝、深さ約16㎝、SP30は直径約30㎝、深さ約40㎝、SP32は直径約56㎝、深さ約24㎝である。SP56は南側が調査区外のため未検出であり、深さは約30㎝である。SP55は長径約85㎝、短径約60㎝、深さ約８㎝で、内

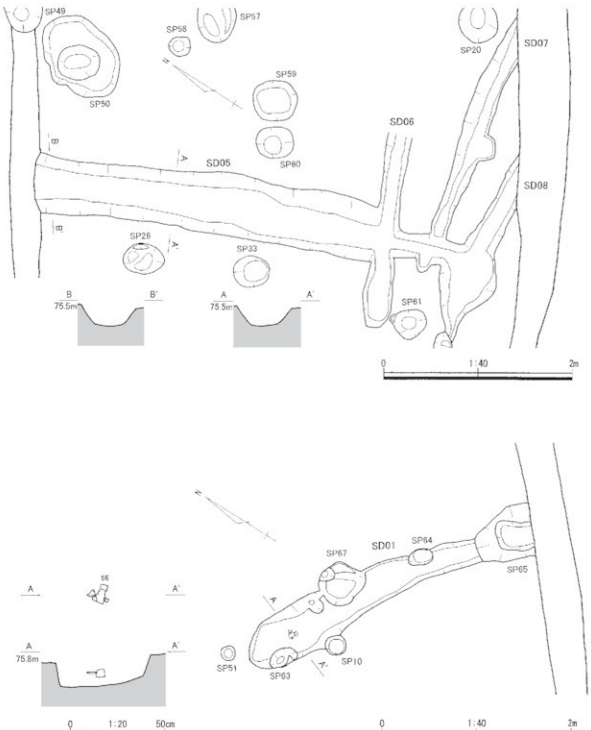


第23図　SB01・02平面図・断面図

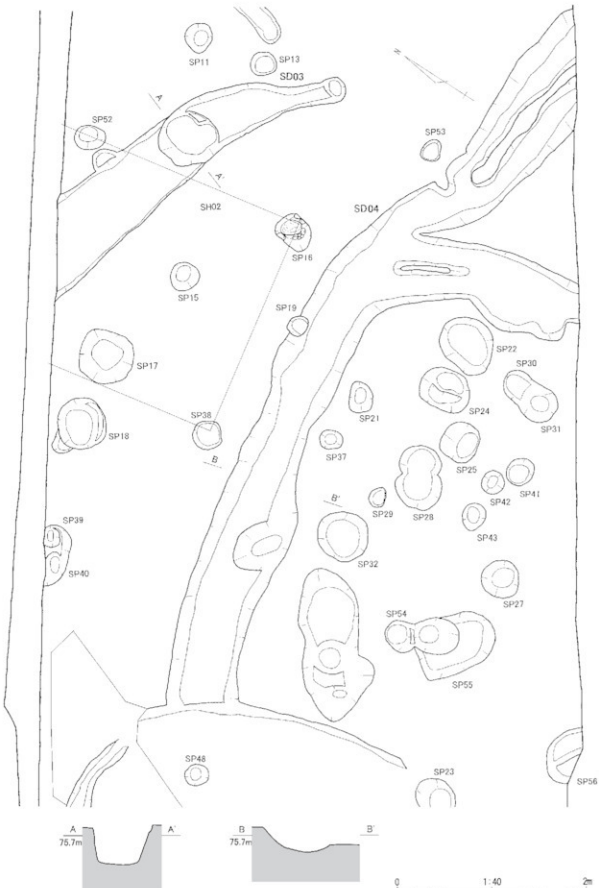
部に長径47㎝、短径約38㎝、深さ約55㎝の楕円形の小穴が接している。

SD01（第20・24図）

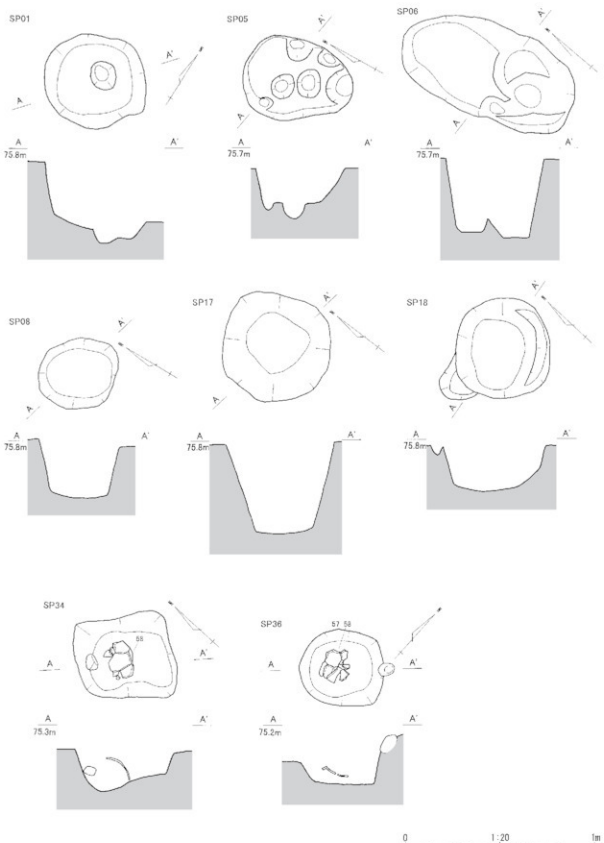
O16グリッド南東部からN16グリッド北東部で検出した溝状遺構である。北西―南東方向に延びており、北西に向かって幅が広くなっている。断面は平坦に掘り込まれており、検出長は約2.7m、検出幅は30～60㎝、深さは約５㎝である。南東側でSP65に接しており、溝の周囲にはSP10・63・64・67などの小穴が接している。北西側の覆土より高坏の脚部破片（第27図56）が出土している。



第24図　SD01・05～08平面図・断面図



第25図　SD03・04平面図・断面図



第26図　SP01・05・06・08・17・18・34・36平面図・断面図

SD02（第20図）

O16グリッド南部からN16グリッド北部にかけて検出した溝状遺構であり、ほぼ南北方向に延びている。検出長は約2.7m、検出幅は20～30㎝、深さは約６㎝である。土器片が出土しているが、細片のため図示できなかった。

SD03（第20・25図）

O16グリッド南西部からN16グリッド北西部で検出した溝状遺構であり、北西―南東方向に延びている。北西に向かって幅が広くなっており、断面は平坦に掘り込まれている。北西端は調査区外のため未検出であり、南東端でSP13に接している。検出長は約3.6m、検出幅は30～80㎝、深さは約10㎝である。土器片が出土しているが、細片のため図示できなかった。

SD04（第20・25図）

N15グリッド東部からN16グリッド中央部で検出した溝状遺構である。ほぼ東西方向に弧を描くように湾曲しており、断面は丸みを帯びている。東側で二本の溝に分かれて調査区外まで延び、西側ではSH01の壁溝に接している。検出長は約8.4m、検出幅は60～84㎝、深さは約10㎝である。溝の覆土は、上層では遺物包含層と類似しているが、下層の覆土はやや砂礫混じりとなる。弥生土器片が出土しているが、細片のため図示できなかった。

SD05～08（第20・24図）

SD05はN15グリッド南部で検出した溝状遺構である。北西―南東方向に延びており、検出長は約4.7m、検出幅は58～70㎝、深さは14～20㎝である。北側の断面は深さ15㎝程度の半月形を呈しており、南側に向かって掘り込みが浅くなる。覆土は上層が暗緑灰色粘土、下層が粘土混じりの砂礫層である。SD05の南端では、ほぼ東西方向に掘り込まれた長さ2.0～2.7m、幅15～30㎝、深さ５～８㎝程度の浅い溝（SD06～08）が接している。SD05・06から土器片が出土しているが、細片のため図示できなかった。

SP01・05・06・08・17・18・34・36（第20・26図）

小穴（SP）は２区第２面で計69基検出しており、そのうち８基について個別図を掲載している。いずれも径45～60㎝、深さ25～50㎝程度であり、底面は概ね平坦に掘り込まれている。このうち、弥生時代後期～古墳時代前期に属すると思われる台付甕（第27図57）はSP36から出土しており、古墳時代前期の甕破片（第27図58）はSP34・36より出土した破片が接合している。また、SP01から土器片が出土しているが、細片のため図示できなかった。

⑶　２区出土遺物

SH01出土遺物（第27図55）

55は壺の口縁部で、口唇部に円形浮文を貼り付け、口縁部に刺突による沈線を施している。内外面は摩耗のため調整不明である。弥生時代後期後半頃に属すると考えられる。

SD01出土遺物（第27図56）

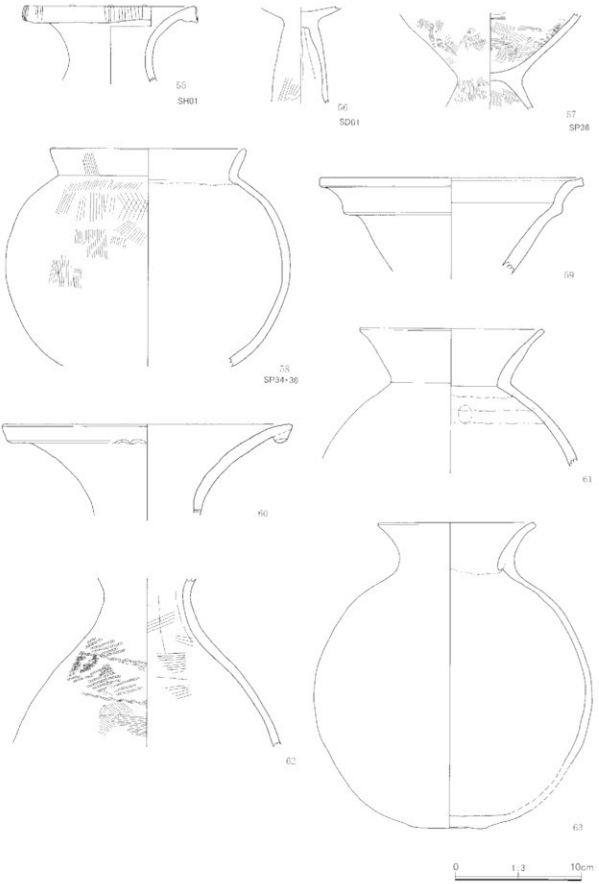
56は高坏の脚部破片であり、脚部の末端が折れて広がる形態になると思われる。風化により内外面の調整は不明である。古墳時代前期末以降に属すると考えられる。

SP36出土遺物（第27図57）

57は台付甕である。胴部外面は斜方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整を施し、台部外面は縦方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整を施す。弥生時代後期から古墳時代前期に属すると考えられる。

SP34・36出土遺物（第27図58）

58は台付甕と思われ、SP34・36から出土した破片が接合している。口縁部外面に縦方向のハケ調整、頸部から胴部上位に縦～斜方向のハケ調整を施す。風化により内面の調整は不明である。古墳時代前期に属すると考えられる。



第27図　２区出土土器１

SA03出土遺物（第29図78）

78は常滑産の甕で、口縁部を横ナデしている。15世紀後半の製品と思われる。

遺構外出土土器（第27図59～第28図77・第29図79～87）

59～77は弥生時代後期から古墳時代前期の土器である。

59～63は壺である。59は有段口縁壺であり、風化により内外面の調整は不明である。60は口唇部に指頭圧痕が残る。風化により内面、外面の調整は不明である。61は風化により内外面の調整は不明であるが、胴部内面に指頭痕と輪積み痕が残る。62は胴部外面に太さ約２㎜のLRの縄文を結節した原体を横位回転し、内外面に横方向のハケ調整の痕跡が残る。63は風化により内外面の調整は不明であるが、頸部内面に輪積み痕が残る。62は弥生時代後期後半の菊川式の系統、60は弥生時代後期後半以降、61・63は古墳時代前期、59は古墳時代前期後半に属すると思われる。

64・66・69・73は台付甕である。64は口縁部が屈曲して外反し、口唇部に刻みを施す。外面には縦方向のハケ調整、内面には横方向のハケ調整を施す。66は頸部内面に接合痕が残り、胴部内面に接合痕および指頭痕が残存する。口縁部内外面に横方向のナデ調整を施し、胴部内外面に斜～横方向のハケ調整を施す。69は胴部外面に斜方向のハケ調整を施し、胴部と台部の接点に指頭圧痕が残る。胴部内面は縦方向のハケ調整後に横方向のハケ調整を施している。73は風化により内外面の調整は不明である。64は弥生時代後期後半の菊川式の系統、66は古墳時代前期に属すると思われる。

65・71・72・74・75は高坏であり、65は坏部、71・72・74・75は脚部破片である。65は風化により内面と外面の調整は不明である。71は脚部に円形の透かし孔を施している。外面は風化により調整不明で、内面には横方向のハケ調整を施す。72は脚部に円形の透かし孔が４箇所観察される。外面にはヘラミガキを施し、内面には縦方向のハケ調整の痕跡が残る。74は風化しているが、外面に縦方向のハケ調整、内面に横方向のハケ調整の痕跡が残る。75は坏部と脚部の接合部に空洞が生じている。風化により内外面の調整は不明である。71・72・75は古墳時代前期前半、65は古墳時代前期中葉、74は古墳時代前期末に属すると考えられる。

68は鉢で、口縁部にひずみが生じている。風化しているが、内外面に横方向のハケ調整を施していると思われる。

67・76・77は屈曲口縁鉢である。67は風化しているが口縁部内外面に横方向のハケ調整を施していると思われる。76は風化により内外面の調整が不明である。77は外面に縦方向のハケ調整を施した後に横方向にヘラミガキを施す。内面は赤彩していると思われ、風化により調整は不明である。いずれも古墳時代前期後半に属すると思われる。

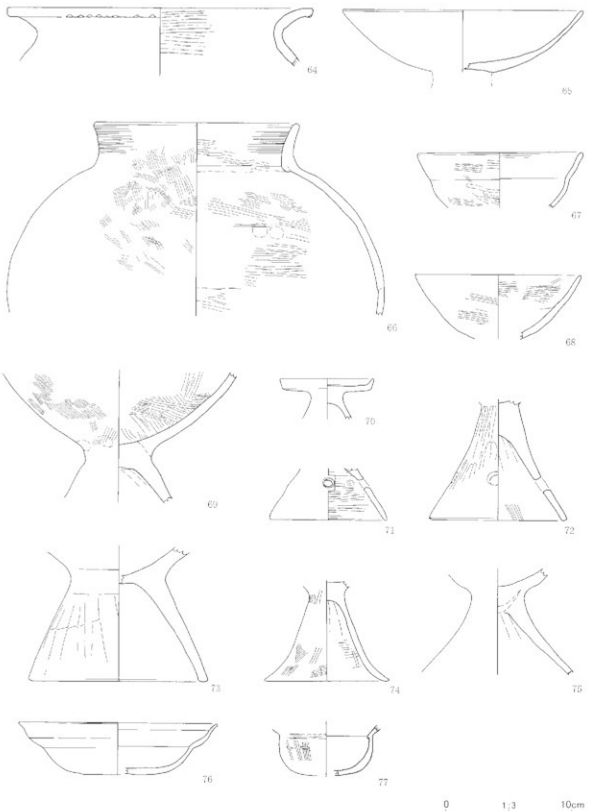
70は小型の器台であり、口縁部に立ち上がりを持つ。風化により内外面の調整は不明である。古墳時代前期に属すると思われる。

79は灰釉陶器の碗で、底部の糸切り痕をナデ消し貼付高台にしている。底部内面に空気が入り膨らんでおり、重ね焼きの外側に灰釉が付いている。旗指古窯14・17号窯期（東山72号窯式併行）の10世紀後葉の製品である。

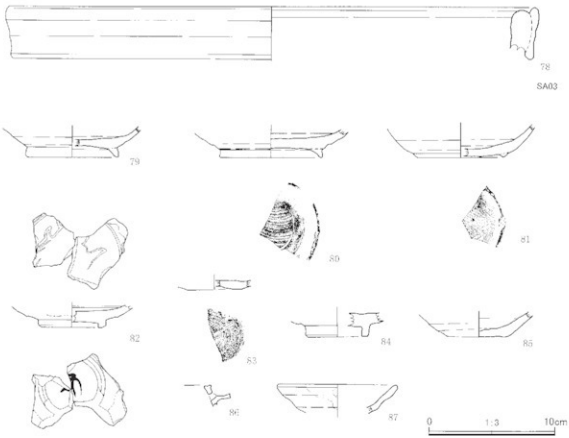
80・81は東遠系の山茶碗である。80は高台付近の糸切り痕を消し中心部を残す。高台の先端にスノコ状圧痕が付いている。Ⅱ－１期の12世紀後葉の製品と思われる。81は底部の糸切り痕を残し、低い高台の先端部にスノコ状圧痕が付いている。Ⅲ－３期の13世紀後葉から14世紀初頭の製品と思われる。

83・85・87はかわらけで、83・87は灯明皿である。83・85は底部外面に糸切り痕が残る。85は15世紀代の製品、83・87は江戸時代の製品と思われる。

82は白磁碗で、底部内面に文様を印刻している。底部外面の高台内に墨書が施されるが、破損により判読は不明である。84は中国龍泉窯系の青磁で底部に高台を付け、内面に印刻が施されるが器種は不明



第28図　２区出土土器２



第29図　２区出土土器３

である。15世紀代の製品と思われる。

86は羽釜の口縁部で時期は不明である。

遺構外出土石器（第30図88～94）

88・89は乳棒状磨製石斧である。88は断面が楕円形で基部に敲打痕があり、全体に細かく敲打し形を整え、刃部を研磨している。刃部と基部は使用により破損している。石質は輝緑岩である。89は断面が円形に近く、周縁部に成形のための敲打痕と研磨痕が観察される。刃部を欠損しており、基部と下端部に使用による敲打痕が残る。石質は粗粒砂岩である。

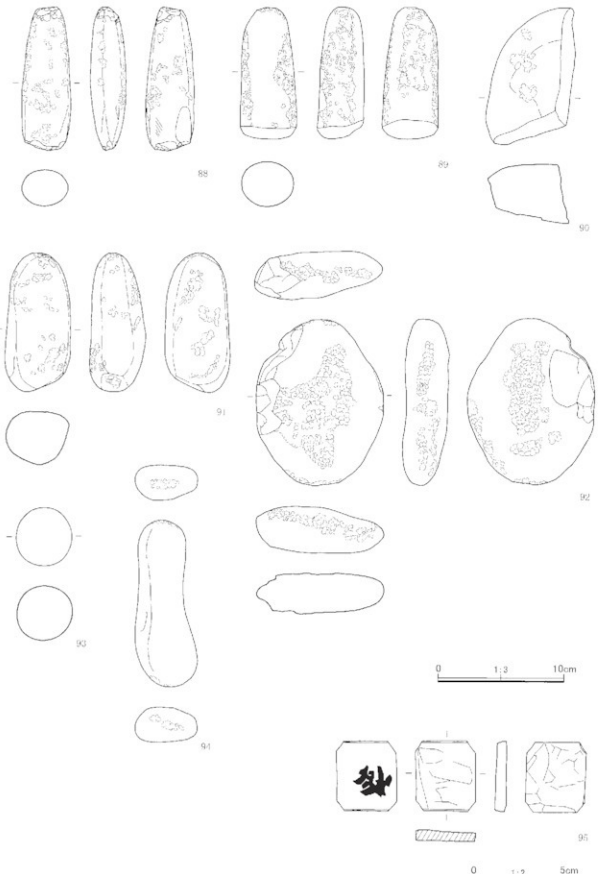
90は欠損しているが磨石と思われ、扁平な円礫の片面を使用している。石質は粗粒砂岩である。

91・92は敲石である。91は細長い河原石の端部や側面に敲打痕が観察される。石質は礫岩である。92は扁平な円礫の縁辺部や表裏面に敲打痕が観察され、縁辺部の一部を欠損している。石質は含礫粗粒砂岩である。

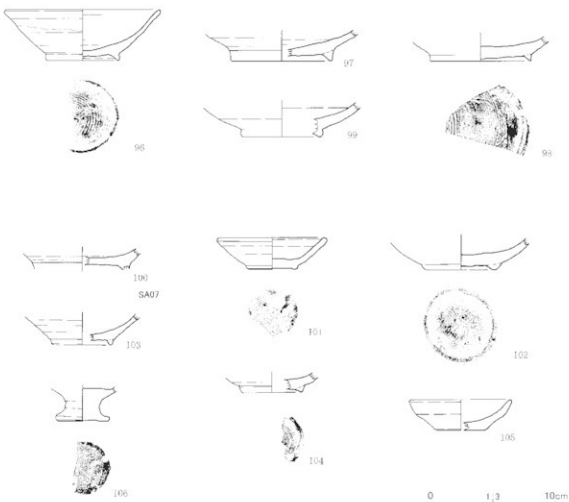
93は直径約4.5㎝の球形の石であり、石質は細粒砂岩である。94は敲石と思われ、上下端部にわずかに敲打痕が観察される。石質は砂質粘板岩である。

遺構外出土木製品（第30図95）

95はヒノキ製の小板状木製品で、木取りは斜め柾目である。厚さ約６㎜の板の四隅が切り落とされており、表裏面に加工痕が残る。表面に墨書が施されるが解読不明である。



第30図　2区出土石器・木製品



第31図　３・４区出土土器

遺構外出土銭貨（第39図159）

159は保存状態が悪いが、明治期の半銭銅貨と思われる。

３　３区の遺構と遺物

(1)　３区検出遺構

SA05・06（第16図）

Ｊ９グリッド南部の暗青灰色砂礫層（第14図C―C'断面８層）下面で検出したL字状の杭列である。SA05は、南北方向に３本の杭が並んでおり、SA06はSA05の最も南側の杭１本を共有して直交し、東西方向に延びる。検出長は、SA05が約3.6m、SA06が約2.4mである。

１区・２区で検出したSA01～03と比べて杭の配置が疎らであり、杭列の周辺で抜けて流れた状態の杭が数本出土している。このことから、砂礫の流れ込みにより、本来打ち込まれていた杭の大半が流失した可能性が考えられる。SA02・03の杭列とは異なり、杭頭を焼いている様子は確認できない。

杭列を検出した面より上層の暗青灰色砂礫層より12～13世紀の山茶碗（第31図97・98）が出土していることから、SA05・06はこれ以前の時期に属すると考えられる。

⑵　３区出土遺物

遺構外出土土器（第31図96～99）

96は灰釉陶器の碗であり、底部の糸切り痕を残している。口縁部外面に灰釉を漬け掛けし、内面には自然釉が付着している。旗指古窯６－Ⅲ－７・８号窯期（折戸53号窯式並行）の10世紀初頭の製品と思われる。

97～99は東遠系の山茶碗である。97は底部の糸切り痕をナデ消している。Ⅱ－１期の12世紀後葉の製品と思われる。98は底部の糸切り痕を残し、底部外面に爪状圧痕が付いている。Ⅲ－２期の13世紀中葉の製品と思われる。

４　４区の遺構と遺物

⑴　４区検出遺構

SA07・08（第32図）

４区では、杭列が２面にわたり検出されており、第１面でSA07、第２面でSA08を検出している。

SA07は暗オリーブ灰色粘土層（第15図６－１層）で検出している。調査区南側で東西方向に延びており、西側ではくの字に折れ曲がり南西方向に延びる。杭列の検出長は約6.4mである。

杭の種類は丸杭が多く、角杭も数本使用している。太い杭は緑灰色砂礫層（第32図②層）まで達しているのに対し、細い丸杭は、確認面から20㎝程度で杭の先端が検出されている。丸材と割材が混在しており、丸材は直径３～５㎝程度、割材は半径７㎝程度である。

SA08は灰色粘土層（第15図６－２層・第32図①層）で検出している。北東―南西方向に延びており、検出長は約6.8mである。杭は丸材と割材を使用しており、大部分の杭が灰色粘土層内で先端が検出されるが、その下層の緑灰色砂礫層（第15図７層）に達している杭や、太い杭についてはさらにその下層の黒褐色粘土層（第15図８－１層）にまで達しているものもある。

これらの杭列の周辺では、灰釉陶器、山茶碗、陶器等の破片が出土している。検出面に20㎝程度の高低差が存在するものの、出土遺物や土層に大きな差が見られず、いずれも12～13世紀頃の水田の杭列と考えられる。

⑵　４区出土遺物

SA07出土遺物（第31図100）

100は山茶碗で、底部の糸切り痕が残り、高台部にスノコ板状の圧痕がある。Ⅲ－２期の13世紀中葉の製品と思われる。

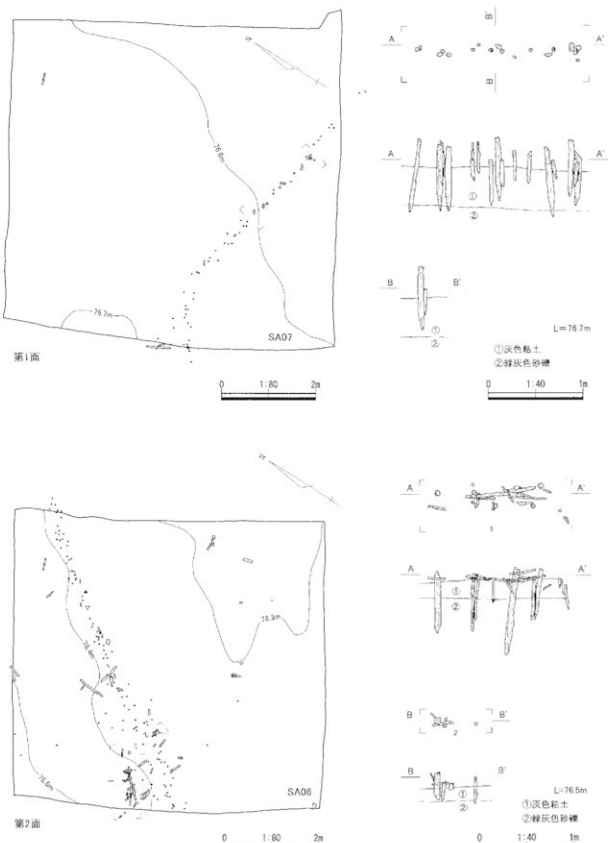
遺構外出土土器（第31図101～106）

101～105は東遠系の山茶碗で、102は碗、101・103・105は小碗、104は小皿である。101は無高台で、底部に糸切り痕を残している。102は雑な高台を貼り付け、底部の糸切り痕を残しており、高台端部にスノコ状圧痕がある。103は底部の糸切り痕を一部ナデ消し、高台端部にスノコ状の圧痕が残る。104は底部の糸切り痕を一部ナデ消している。105は無高台で糸切り痕が残り、焼成が甘い。103はⅠ－２期の12世紀中葉の製品、104はⅡ－１期の12世紀後葉の製品、102はⅢ－１期の13世紀前半の製品である。

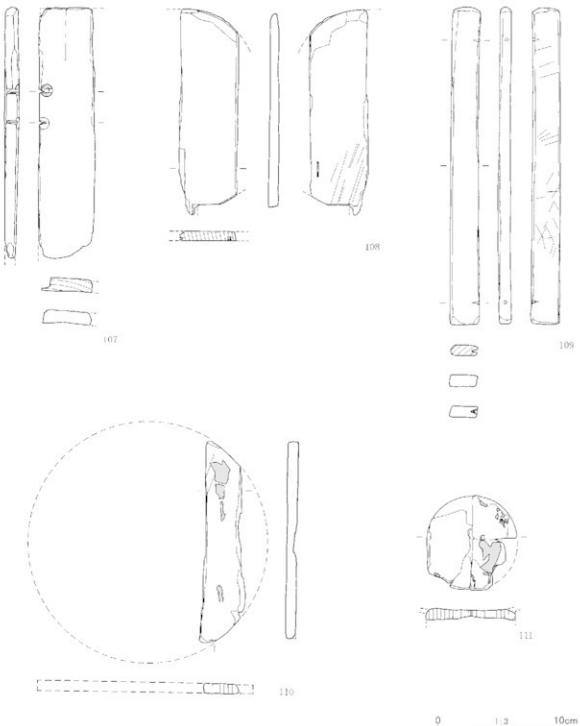
106は志戸呂産の仏餉器で底部に糸切り痕を残す。18世紀から19世紀の製品である。

遺構外出土木製品（第33図107～111）

107はヒノキ製の火きり板であり、木取りは板目である。桶の部材の転用と思われ、上端部には桶の部材として使用した際の滑らかな加工が残っている。火きり臼が２か所に残存しており、上部の孔は深く削られ、焦跡が残存しているが、下部の孔はほとんど未使用である。108はスギ製の曲物底板であり、木取りは柾目である。両面上端部に向かって斜めに加工を施しており、裏面にカバ紐が残存しているが、



第32図　SA07・08平面図・断面図



第33図　４区出土木製品

表面には貫通していない。下端部には二次転用の際に加工したと見られる痕跡が残存する。109はヒノキ製の用途不明の部材であり、木取りは斜め柾目である。右側面上部に径２㎜の木釘孔が残り、下部には木釘が残存している。裏面には刃痕が多数残存する。110はヒノキ製の曲物底板であり、木取りは柾目である。表面の一部に黒漆が残存しており、刃物による削り痕が付いている。裏面中央には幅1.5㎝、深さ

0.2㎝程度の切り込みが施される。111はケヤキ製の漆椀底部であり、木取りは柾目である。表面（内面底部）の一部に黒漆が残存する。裏面（高台部）は劣化が著しいが、一部に黒漆が残存する。

5　５区の遺構と遺物

(1)　５区検出遺構

SX01（第34・35図）

５区南東部で検出された石敷遺構であり、直径10～20㎝程度の石が東西約2.7m、南北約2.2mの範囲に広がっている。石の広がる範囲の平面形は不定形であるが、石敷が複数の箇所に分かれて集中しているようにも見え、石が平面的に敷かれておらず凹凸が見られる。検出面は北西から南東にかけて傾斜している。南側は調査区外に続いており、石敷全体の形状は不明である。

これらの石敷の範囲から、山茶碗や陶器等（第36図112～123・127）が出土している。出土遺物から12～13世紀頃の石敷遺構と思われるが、遺構の性格は不明である。東側でSX02に隣接することから、SX01・SX02は互いに関連する遺構と思われる。

SX02（第34・35図）

SX01の東側に隣接する石組遺構であり、掘方の規模は検出長約1.3m、検出幅約1.0m、深さ約45㎝である。掘方の平面形は隅丸方形であり、底面はほぼ平坦に掘り込まれている。

掘方は、西側では深さ８～９㎝程度に浅く掘られ、石組の外周付近からほぼ垂直に深く掘り込まれている。石組の裏込め土（第35図３層）は、緑灰色礫層（第35図４層）と暗灰色粘土層（第35図５層）の混層である。

石組は円形に組まれており、外径約1.0m、内径約70㎝、深さは約30㎝である。底部には径８～15㎝程度の礫を敷き詰めており、４層の礫をそのまま固めて石組の底部として利用していると思われる。これらの礫の外側に直径20～30㎝程度の礫を円形に組んで側壁にしている。

遺構の性格は不明であるが、SX01の東側に隣接して検出されていることから、SX01と関連する遺構であると思われる。３層中央には泥が混入しており、石組を水溜として使用し、底部から漏れた泥が裏込め土中に堆積した可能性が考えられる。石組の間や周辺から山茶碗や甕の破片（第36図124～126・第37図135）および用途不明の銅製品（第38図147）が出土している。出土遺物から、12～13世紀頃に属する遺構と考えられる。

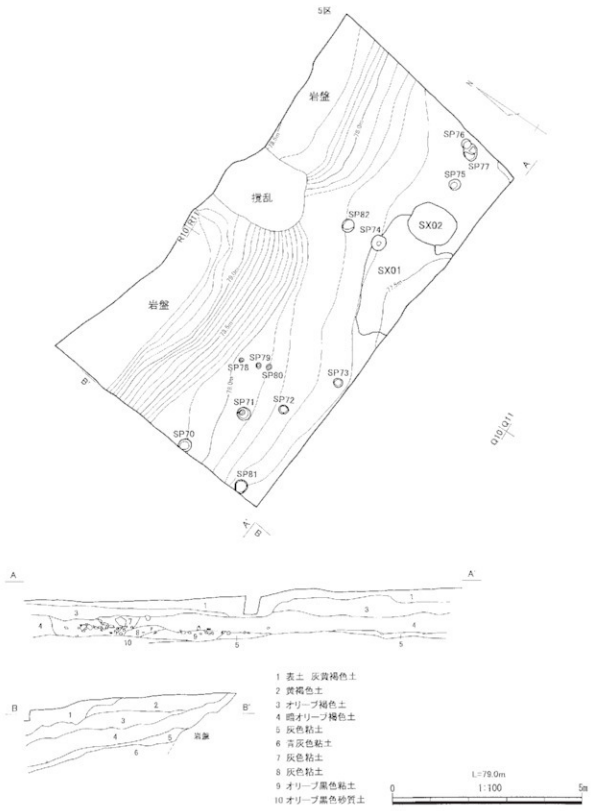
SP70～SP82（第34図）

５区南側では計13基の小穴を検出しており、平面形はいずれも円形または楕円形である。これらの小穴のうち、SP78～80は30～50㎝間隔で北西―南東方向に並んでおり、柵または杭列の痕跡である可能性が考えられる。直径は10～15㎝、深さは10～20㎝程度である。

SP70～73・81は調査区西側で検出しており、直径25～35㎝、深さ10～30㎝程度である。

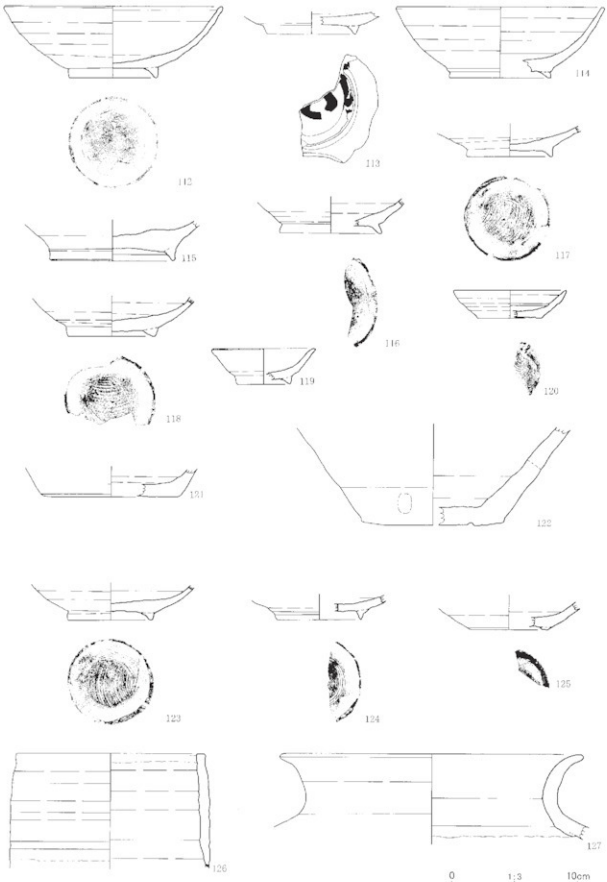
SP74～77・82は調査区東側で検出しており、SP74はSX01の下面で検出している。小穴の直径はいずれも30～50㎝、深さは20～40㎝程度である。SP77はSP76の南側に隣接しており、SP76がSP77を切っている。

小穴の覆土は、SP74・75が暗灰色粘土層、それ以外は灰色粘土層である。SP73・74から土器片が出土しているが、細片のため図示できなかった。SP77より用途不明の木製品（第38図146）が出土している。

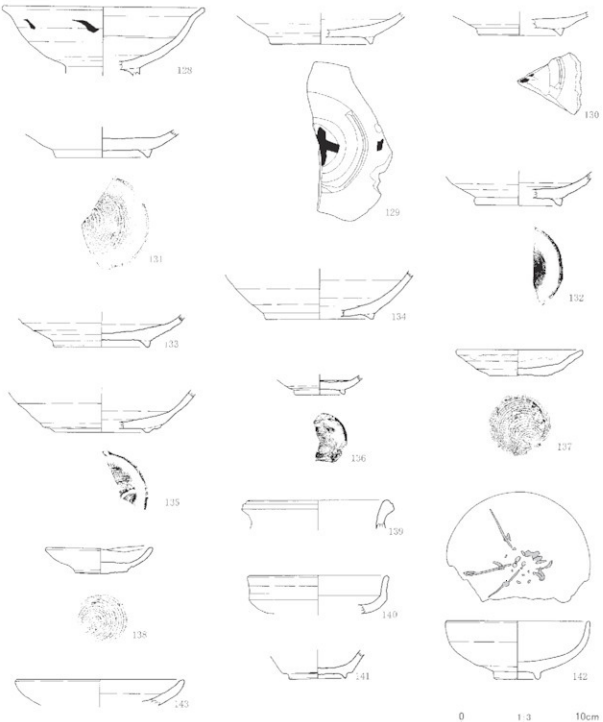


第34図　５区遺構全体図・土層断面図

第35図　SX01・02検出状況



第36図　５区出土土器１

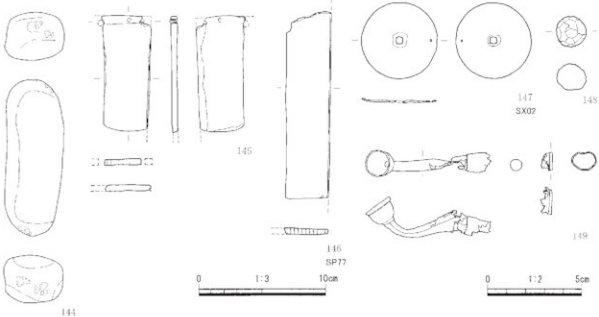


第37図　５区出土土器２

⑵　５区出土遺物

SX01出土遺物（第36図112～123・127）

112～114・116～120・123は東遠系の山茶碗で、112～114・116～118は碗、119・120は小碗である。112・113・116・117・123は底部の糸切り痕を残し、高台端部にスノコ状圧痕が残る。113は高台内部に



第38図　５区出土石器・木製品、出土金属製品

朱書きを施し、内面と高台部の一部に墨痕が観察される。114は焼成が甘く、高台端部にスノコ状圧痕が残り、口縁内面の一部に墨痕が観察される。118・119は底部の糸切り痕をナデており、高台端部にスノコ状圧痕が残る。120は底部外面に糸切り痕を残している。116・123は内面に重ね焼き痕が残る。112はⅠ－１期の12世紀前半の製品、113・119・123はⅠ－２期の12世紀中葉の製品、114・116～118・120はⅡ－１期の12世紀後葉の製品と思われる。

115・122は常滑産の鉢である。115は底部の空気抜きが甘く、膨張して器壁が膨らんでいる。12世紀後葉から13世紀代の製品と思われる。122は内面に自然釉がかかり、底部付近の外面に指頭状の圧痕が残る。

127は渥美産の甕で口縁部が外反する。12世紀中葉から後葉の製品と思われる。

121は志戸呂産の壺底部で、17世紀代の製品と思われる。

SX02出土遺物（第36図124～126・第37図135・第38図147）

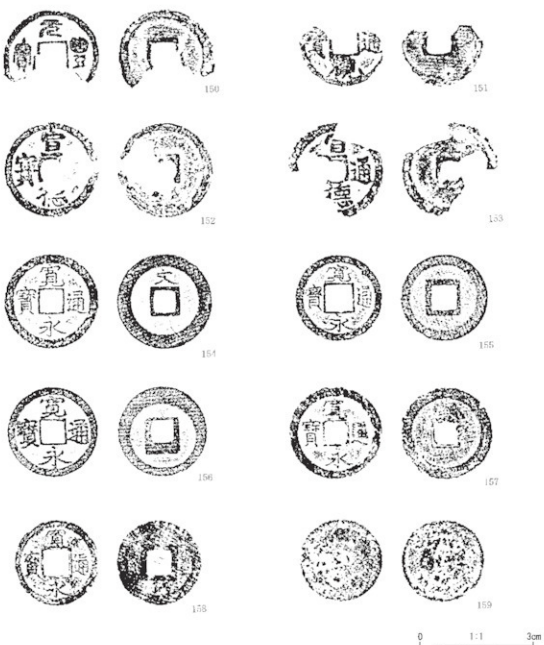
124・125・135は東遠系の山茶碗である。124は底部の糸切り痕を残し、高台端部にスノコ状圧痕が残る。Ⅱ－１期の12世紀後葉の製品と思われる。125は底部に雑な高台を貼り付け、糸切り痕を一部ナデている。Ⅲ－２期の13世紀中葉の製品と思われる。135は焼成が甘く、底部に雑な高台を貼り付け、底部の糸切り痕を残している。高台端部には圧痕が残る。Ⅲ－３期の13世紀後葉の製品と思われる。

126は志戸呂産の片口で17世紀代の製品と思われる。

147は用途不明の銅製品である。直径約４㎝の円形を呈しており、中心部に一辺約３㎜の方形の貫通した穴を持ち、外周付近の１箇所に径約１㎜の穴を持つ。表裏面共に文様は見られない。

SP77出土遺物（第38図146）

146はヒノキ製の用途不明木製品であり、木取りは柾目である。145と同一個体と思われるが、接合点は不明である。表面と右側面に黒漆が塗られており、裏面底部にも黒漆が残存する。



第39図　出土銭貨

遺構外出土土器（第37図128～134・136～143）

128は灰釉陶器の碗である。内面に灰釉を付け、外面の一部にも灰釉を施している。口縁部外面には墨痕が残る。旗指22号窯期（百代寺窯式併行）の11世紀前半の製品と思われる。

129～134・136・138は東遠系の山茶碗で、129～134は碗、136は小碗、138は小皿である。129～132・134・138は底部に糸切り痕を残し、136は底部の糸切り痕をナデている。129・131・132は高台端部にスノコ状圧痕が残る。133は焼成が甘く、底部の糸切り痕や高台端部の状況は不明である。129・130は底部外面に朱書きを施している。131～133は内面に重ね焼き痕が残る。132はⅠ－１期の12世紀前半の製品、133・136はⅠ－２期の12世紀中葉の製品、138はⅡ－１期の12世紀後葉の製品、129～131はⅡ－２期の12

世紀末の製品、134はⅢ－１期の13世紀前半の製品と思われる。

137・139は古志戸呂製品である。137は緑釉小皿で口縁部に鉄釉を付け、底部に糸切り痕を残している。139は有耳壺と思われる。いずれも後Ⅳ期の15世紀末の製品と思われる。

140・141は志戸呂産の製品で、いずれも内外面全体に灰釉が施されている。140は仏餉器で、18世紀前半の製品と思われる。141は碗で、18世紀代の製品と思われる。

142は瀬戸産の梅文皿で、内外面全体に灰釉を施し、内面に呉須と鉄釉で文様を付けている。登窯第８小期の18世紀後葉の製品である。

143はかわらけの皿口縁部である。

遺構外出土石製品（第38図144）

144は敲石と思われ、縦長な河原石の両端にわずかに敲打痕が観察される。石質は中粒砂岩である。

遺構外出土木製品（第38図145）

145はヒノキ製の用途不明木製品であり、木取りは柾目である。146と同一個体と思われるが、接合点は不明である。表面の一部と右側面および上端部に黒漆が残存する。上部の二箇所に径３～５㎜程度の孔の痕跡が残存しており、表面上部にこれらの孔を結ぶ線が引かれている。上部には径３㎜程度の方形の木釘が打たれている。

遺構外出土銭貨（第39図150～153）

150は元豊通寶、151は大観通寶、152・153は宣徳通寶である。これら４枚の銭貨は本来重なっていたものと思われ、いずれも穴の内部に繊維が付着した状態で出土している。

第４表　土器観察表

図版番号	写真図版番号	観況番号	種　別	器種	区	遺構	層　位	胎　土	色　調	残存率	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)
第７図	15	1	土師器	甕？	AT	土坑	覆土底部	密 石英などを含む	10YR8/4浅黄橙				
第７図	15	2	弥生土器	台付甕	14-1・2T		暗緑灰色粘土層	やや粗 5mm大の小礫を含む	内外面:2.7Y8/1灰白	口縁部15%			
第７図	15	3	古式土師器？	鉢	14-1T		暗緑灰色粘土層	径2mm以下の長石少量 赤色粒子少量 4mmの灰白色軟礫多量 2mmの灰色礫多量に含む	5YR7/8橙	70%	(9.2)	4.0	6.55
第７図	22	4	須恵器	坏身	19T		暗緑灰色粘土層	密 白色粒子含む	内面:2.5YR5/1赤灰 外面:N6/灰	底部25%		(11.8)	
第７図	22	5	灰釉陶器	碗	12-1T	溝	暗緑灰色粘土層	径1mmの長石・黒色粒子含む	外面体部～内面一部:N 4/1灰 内外面底部:5Y7/1灰白	底部100%		高台径5.6	
第７図	15	6	灰釉陶器	碗	7-1T	土坑	暗緑灰色粘土層	径1～3mmの長石 黒色の吹出し有	5Y8/1灰白 釉:2.5GY6/1オリーブ灰	45%	(14.9)	高台径(7.4)	5.6
第７図	15	7	灰釉陶器	碗	22T		暗緑灰色粘土層	1mm以下～5mmの長石少量 砂粒少量含む	5Y7/1灰白	口縁～体部10% 底部100%	(13.6)	高台径6.0	3.8
第７図	22	8	灰釉陶器	碗	15-1T		暗緑灰色粘土層	径1mmの長石・黒色粒子含む	N61灰 底部:10Y7/1灰白	底部～体部下半35%		高台径(6.16)	
第７図	22	9	山茶碗	碗	20-2T		暗青灰色礫層	密 白色粒子を多く含む	内外面:N7/灰白	底部30%		(7.4)	
第７図	15・25	10	山茶碗	碗	20-1T		暗オリーブ灰色粘土層	密 白色粒子含む	内外面:2.5Y7/1灰白	底部60%		(6.8)	
第７図	22	11	山茶碗	碗	11-1T		灰色粘土・褐色土層	径1～2mmの長石・黒色粒子砂粒含む	N7/1灰	底部60%		高台径(5.7)	
第７図	22	12	灰釉陶器	碗	11-2T		暗緑灰色粘土層	径1～2mmの長石 1mmの黒色粒子含む	10Y R7/1灰白 釉:5Y5/3灰オリーブ	底部25%		高台径(5.88)	
第７図	22	13	山茶碗	碗	19T		暗灰黄色土層	径1mmの長石・黒色粒子含む	7.5YR6/4にぶい橙 底部:10YR5/2灰黄褐	底部60%		(6.3)	
第７図	15・25	14	山茶碗	碗	16-2T		暗緑灰色粘土層	径1mm以下の赤石・黒色粒子少量 3mm以下の赤色粒子微量に含む 幅0.5mm以下の白色粘土の層有り	内外面:10YR5/2灰黄褐 断面:7.5YR6/4にぶい橙	底 部 ～ 体 部20%		高台径(7.4)	
第７図	22	15	山茶碗	小碗	18T		暗緑灰色粘土層	径1～2mmの長石 1mmの黒色粒子含む	N61/ 灰 釉:10Y6/1灰	口縁部～底部15%	(9.6)	高台径(4.2)	(2.9)
第７図	22	16	山茶碗	小皿	20-1T		暗オリーブ灰色粘土層	密 白色粒子含む	内面:2.5Y6/1黄灰 外面:2.5Y7/1灰	底部100%		4.2	
第７図	15	17	山茶碗	小皿	16-2T		暗緑灰色粘土層	径1mm以下の長石・黒色粒子少量含む	N6/ 灰	口 縁 ～ 体 部5% 底部70%	(7.45)	(4.0)	2.05
第７図	16	18	山茶碗	小皿	17-1T		暗オリーブ色粘土層	1mm大の細砂含む	N6/ 灰	100%	7.6	3.7	2.0
第７図	22	19	山茶碗	小皿	15-1T		灰色粘土・褐色土層	径1mmの長石・黒色粒子含む	N51/ 灰	口縁部～底部10%	(7.48)	(4.0)	1.8
第７図	22	20	山茶碗	小皿	21T		暗青灰色粘土層	径1mm以下の白色粒子・黒色粒子含む	5Y8/1灰白	口縁部～底部20%	(8.25)	(4.0)	1.3
第７図	22	21	山茶碗	小皿	20-2T		暗青灰色礫層	径1mmの長石・黒色粒子含む	N51/ 灰	口縁部～底部10%	(7.0)	(4.0)	1.83
第８図	22	22	山茶碗	小皿	15-2T		暗緑灰色粘土層	密 白色粒子含む	内外面:N6/灰	15%	(9.0)	(5.2)	1.8
第８図	22	23	山茶碗	小皿	15-2T		暗緑灰色粘土層	密 白色粒子含む	内外面:N6/灰	20%	(7.7)	(4.4)	1.9
第８図	16	24	不明	不明	10T		灰色粘土・褐色土層	密 白色粒子含む	N6/灰				
第８図	23	25	かわらけ		5-2T	土坑	黒褐色土層	密 3mm以下の橙色の砂粒などを含む	内外面:7.5YR8/3浅黄橙	口縁部25%	(11.2)		
第８図	23	26	陶器	甕	6-2T	溝	褐色粘質土層	密 白色粒子含む	内外面:7.5YR6/3にぶい褐	底部30%		(18.6)	

図版番号	写真図版番号	挿図番号	種　別	器種	区	遺構	層　位	胎　　土	色　　調	残存率	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）
第８図	23	27	陶器	仏花瓶	11-1T		灰色粘土・褐色土層	密 白色粒子含む	内面：10YR8/2灰白 外面釉：5Y8/4淡黄	体部25％			
第８図	16	28	かわらけ		7-2T		暗緑灰色粘土層	赤色粒子少量含む	5YR7/6橙	口縁部～底部65％	(7.4)	(4.1)	1.8
第８図	23	29	陶器	甕	7-2T		暗オリーブ色粘土層	密 白色粒子含む	内外面：7.5YR5/4にぶい褐	底部～体部下部20％		(12.9)	
第８図	23	30	陶器	平碗	7-2T		灰色粘土層	密 白色粒子含む	内面釉：7.5Y7/3浅黄 外面：5Y7/1灰白	口縁部10％	(19.4)		
第８図	23	31	陶器	折縁深皿	4-1T・7-2T		オリーブ褐色土・灰色粘質土・暗緑灰色粘土層	密 白色粒子含む	内外面釉：10YR7/2灰白	口縁部15％	(43.6)		
第８図	23	32	陶器	大型筒型容器	7-2T		表採（排土）	密 白色粒子含む	内外面釉：10Y6/2オリーブ灰	口縁部15％	(13.7)		
第８図	16	33	陶器	折縁小皿	6-2T		オリーブ褐色土層	褐色の吹き出し	露胎・断面：2.5Y8/3淡黄 釉：7.5Y7/3浅黄透明	口縁部～底部25％	(7.4)	(3.2)	2.0
第８図	16	34	陶器	瓶子	7-2T		暗緑灰色粘土層	密 白色粒子含む	内面：N7/灰 外面釉：5Y6/3オリーブ黄	肩 部 ～ 体 部20％			
第８図	23	35	陶器	口広有耳壺	6-2T		にぶい黄褐色土、黄褐色土層	密 白色粒子含む	内面：10YR7/1灰白 外面釉：5YR5/4にぶい赤褐	肩部～体部上部20％			
第８図	23	36	陶器	小碗	9-1T		灰色粘土・褐色土層	長石微量含む	露胎・断面：2.5Y8/2灰白 釉：7.5Y7/3浅黄	体 部 ～ 底 部30％	(8.9)	高台径(5.3)	2.5
第８図	23	37	陶器	片口	7-2T		暗緑灰色粘土層	密 白色粒子含む	内面：7.5YR6/3にぶい褐 外面：2.5YR5/4にぶい赤褐	1％			
第８図	16	38	陶器	皿	7-2T		暗オリーブ色粘土層	径1mm以下の長石・黒色粒子少量含む	内外面：5YR6/4にぶい橙 断面：7.5YR6/1褐灰 釉：5YR4/3にぶい赤褐	底部40％	(10.2)	(5.4)	2.0
第17図	23	48	陶器	天目茶碗	1区		灰色粘土最下層	径1mm以下の白色粒子・黒色粒子を含む	露胎・断面：10Y7/1灰白 釉：7.5YR2/1黒	底部～体部下半25％		高台径(4.9)	
第17図	23	49	陶器	小坏	1区		灰色粘土最下層	径1mm以下の白色粒子・黒色粒子を含む	露胎：7.5Y4/1灰 断面：N7/灰白 釉：10Y5/2オリーブ灰	口縁部～体部20％	(7.75)		
第17図	16	50	陶器	皿	1区		暗青灰色粘土層	径1mm以下の白色粒子・黒色粒子を少量含む	内外面：10R5/6赤 断面：N7/灰 釉：2.5YR4/3にぶい赤褐	口縁部～底部10％	(11.8)	高台径(4.8)	2.5
第17図	23	51	陶器	志野丸皿	1区		灰色粘土最下層	微細な黒色粒子含む	5Y8/1灰白	底部50％		高台径(5.8)	
第17図	23	52	陶器	擂鉢	1区		灰色粘土層	微細～1mmの白色粒子・黒色粒子・茶色粒子含む	外面：2.5YR5/4にぶい赤褐 内面：5YR4/6赤褐 断面：5YR7/6橙	体部下半5％			
第17図	23	53	陶器	擂鉢	1区		灰色粘土層	径1mm以下の白色粒子・黒色粒子・赤色粒子含む	断面：5YR7/6橙 内外面：2.5YR5/4にぶい赤褐	底部10％		(11.2)	
第17図	23	54	陶器	擂鉢	1区		排土中	径1mm以下の白色粒子・黒色粒子少量含む	内外面：2.5YR4/3褐にぶい赤褐 断面：N6/灰	底部1％			
第27図	16	55	弥生土器～古式土師器	壺	2区	SH01	暗緑灰色粘土層上面	粗 径1～5mm位の軟灰白色粒子多数　砂粒 赤色粒子少量含む	10YR7/2にぶい黄橙	口縁部～頸部100％	(13.4)		(6.0)
第27図	16	56	古式土師器	高坏	2区	SD01	覆土	径1～2mmの長石 微細透明石英　赤色粒子 砂粒含む	7.5YR8/3浅黄橙	脚部10％			
第27図	16	57	弥生土器～古式土師器	台付甕	2区	SP36	覆土	径1mmの長石 1～2mmの黒色粒子　砂粒 5mmの礫含む	外面：10YR7/2にぶい黄橙 内面：10YR6/1褐灰	胴 部 ～ 台 部20％			
第27図	17	58	古式土師器？	台付甕？	2区	SP34・36	覆土	径1～2mmの長石 1mmの黒色粒子　砂粒 5mmの礫　赤色粒子含む	外面：10YR6/3にぶい黄橙 内面：10YR6/1褐灰	口 縁 ～ 胴 部20％	(14.8)		
第27図	17	59	古式土師器	壺	2区		暗緑灰色粘土層	密 白色・赤色などの砂粒含む	7.5YR/4にぶい橙	口縁部～頸部80％	20.4		(7.6)
第27図	17	60	弥生土器～古式土師器	壺	2区東		暗緑灰色粘土層	やや粗 5～6mm大の小礫を含む	内外面：10YR7/3にぶい黄橙	口縁部20％	(22.8)		
第27図	17	61	古式土師器	壺	2区谷部		暗緑灰色粘土層	粗？ 径1～4mm位の砂粒含む	7.5YR7/13にぶい橙	頸部20％	(14.2)		(10.7)
第27図	17	62	弥生土器	壺	2区		暗緑灰色粘土層	径1～2mmの長石　砂粒 3mmの礫多量 1～5mmの茶色礫含む	7.5YR6/4にぶい橙	頸部～胴部上半60％			

図版番号	写真図版番号	挿図番号	種　別	器種	区	遺構	層　位	胎　土	色　調	残存率	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）
第27図	17	63	古式土師器	壺	2区		暗緑灰色粘土層	径2～3mmの砂粒含む	7.5YR7/4にぶい橙	40%	(12.0)	5.8	24.0
第28図	17	64	弥生土器	台付甕	2区		暗緑灰色粘土層	やや粗 5mm以下の小礫を含む	内面:10YR7/1灰白 外面:10YR7/4にぶい黄橙	口縁部10%	(24.1)		
第28図	24	65	古式土師器	高坏	2区東		暗緑灰色粘土層	径1mの長石　赤色粒子 砂粒　透明石英少量含む	外面:7.5YR6/3にぶい褐 内面:10YR5/1褐灰	口縁部～体部30%	(18.8)		
第28図	17	66	古式土師器	台付甕	2区谷部		暗緑灰色粘土層	径1mm以下の長石少量 赤色粒子 1～5mmの灰色礫多量に含む	外面:10YR7/2にぶい黄橙 内面口縁部:2.5Y7/1灰白 内面他:2.5Y4/2暗黄灰	口縁部～胴部上半15%	(15.7)		
第28図	24	67	古式土師器	鉢	2区谷部		暗緑灰色粘土層	径1mの長石・黒色粒子 砂粒　5mの礫 1mm以下の赤色粒子少量含む	2.5Y7/6橙	口縁部～体部20%	(12.74)		
第28図	24	68	古式土師器？	鉢	2区谷部		暗緑灰色粘土層	径1mの長石・黒色粒子 砂粒含む	外面:7.5YR8/4 内面:5YR7/4にぶい橙	口縁部～体部40%	(13.0)		
第28図	18	69	弥生土器～古式土師器	台付甕	2区谷部		暗緑灰色粘土層	径1mm以下の長石少量 赤色粒子 灰色粘土質粒少量 2～4mの灰色礫多量に含む	外面:10YR6/1褐灰 内面:2.35Y4/1黄灰	体部30%			
第28図	24	70	古式土師器	器台	2区		暗緑灰色粘土層	径1～2mmの長石 橙色粒子　砂粒含む	外面:2.5YR6/2橙 内面:5YR7/6橙	口縁部～坏部10% 台部上部25%	(7.32)		
第28図	24	71	古式土師器？	高坏	2区		緑土中	径1mmの長石　茶色粒子 赤色粒子　砂粒含む	10YR7/2にぶい黄橙	脚部25%		脚部径(9.14)	
第28図	18	72	古式土師器？	高坏	2区		暗緑灰色粘土層	径1mmの長石 1～2mmの赤色粒子　砂粒 3mmの礫含む	外面:2.5YR6/6橙 内面:5YR6/6橙	脚部30%		脚部径(10.1)	
第28図	18	73	弥生土器～古式土師器	台付甕	2区谷部		暗緑灰色粘土層	径1～2mmの長石・黒色粒子 1～4mmの橙色粒子含む	10YR8/1灰白	台部80%		台部径(14.16)	
第28図	18	74	古式土師器	高坏	2区谷部		暗緑灰色粘土層	径1～2mmの長石　砂粒 5mm礫　赤色粒子含む	7.5YR8/3浅黄橙	脚部80%		脚部径(9.7)	
第28図	19	75	古式土師器	高坏	2区谷部		暗緑灰色粘土層	径1mmの長石　砂粒　礫 赤色粒子含む	外面:10YR6/1褐灰 内面:2.5Y6/6橙	脚部20%			
第28図	24	76	古式土師器	鉢	2区谷部		暗緑灰色粘土層	径1mm以下の長石含む 砂粒　赤色粒子含む	5YR6/6橙	体部10%	(15.5)		4.05
第28図	24	77	古式土師器	鉢	2区谷部		暗緑灰色粘土層	径1mmの長石　赤色粒子 砂粒含む	外面:7.5YR7/4にぶい橙 内面:2.5YR7/8橙	体部25%			
第29図	24	78	陶器	甕	2区	SA03	暗青灰色粘土層	径1mm以下の白色粒子 1～2mmの黒色粒子少量含む	N4/灰	口縁部1%	(41.3)		
第29図	24	79	灰釉陶器	碗	2区		暗緑灰色粘土層	細砂含む	2.5Y7/1灰白 内面釉:7.5Y4/2オリーブ灰	底部50%		高台径(7.20)	
第29図	24	80	山茶碗	碗	2区		緑土中	密	外面:灰N61 内面:灰N51	底部25%		高台径(8.0)	
第29図	24	81	山茶碗	碗			表採	密	N61灰 釉:10Y4/2オリーブ灰	底部～体部下半10%		高台径(6.8)	
第29図	19・25	82	白磁	碗	2区		灰色粘土層	径1mm以下の白色粒子・黒色粒子微量に含む	7.5Y8/1灰白 釉:透明無色	底部～体部下半25%		高台径(5.3)	
第29図	24	83	かわらけ	燈明皿	2区		暗青灰色粘土層	密　白色粒子含む	内外面:7.5YR6/2灰褐	底部45%		(4.3)	
第29図	24	84	青磁	不明	2区		暗青灰色粘土層	径2mm以下の白色粒子 1mm以下の黒色粒子含む	露胎・断面:N6/　灰 釉:5GY6/1オリーブ灰	底部15%		高台径(5.0)	
第29図	24	85	かわらけ	不明	2区		灰色粘土最下層	径1mm以下の白色粒子・赤色粒子少量 1～2mmの黒色粒子含む	外面:10YR5/2灰黄褐 内面:5YR7/6橙	底部100% 体部下半50%		4.7	
第29図	24	86		羽釜	2区		暗青灰色粘土直上層	密　白色粒子含む	内面:10YR4/2灰黄褐 外面:10YR6/3にぶい黄橙	1%			
第29図	24	87	かわらけ	燈明皿	2区		耕作土	密　白色粒子含む	内面:7.5YR5/3にぶい褐 外面:10YR8/4浅黄橙	口縁～体部15%	(9.3)		
第31図	19	96	灰釉陶器	碗	3区		青灰色砂礫層・暗緑灰色粘土層	4mm大の礫含む	5Y5/1灰色	口縁部～体部30% 底部60%	(12.4)	(5.7)	4.0
第31図	25	97	山茶碗	碗	3区		暗青灰色砂礫層	径1～2mmの長石 1mmの黒色粒子含む	外面:N61/51灰	底部10%		高台径(7.92)	
第31図	25	98	山茶碗	碗	3区		暗青灰色砂礫層	径1mmの黒色粒子・長石含む	N61灰	底部40%		高台径(8.0)	

図版番号	写真図版番号	挿図番号	種　別	器種	区	遺構	層　位	胎　　土	色　　調	残存率	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）
第31図	25	99	山茶碗	碗	3区		暗緑灰色粘土層	密	N61/灰	底部～体部下半15%		高台径（6.2）	
第31図	25	100	山茶碗	碗	4区	SA07		径1mmの長石・黒色粒子	N61/灰	底部25%			
第31図	19	101	山茶碗	小碗	4区		緑色礫層直上	径1～2mmの長石・黒色粒子含む	10YR6/1褐灰	口縁部～体部10% 底部75%	（8.12）	（4.0）	2.42
第31図	25	102	山茶碗	碗	4区		緑色礫層直上	径1mmの長石・黒色粒子	外面：10Y4/1灰 内面：N51/灰	体部下半25% 底部100%		5.2	
第31図	25	103	山茶碗	小碗	4区		緑色礫層直上	径1mmの長石・黒色粒子	10Y6/1灰 外面釉：10Y3/1オリーブ黒 内面釉：7.5Y5/1灰	底部～体部下半25%		（4.48）	
第31図	25	104	山茶碗	小皿	4区		灰色粘土層	径1～3mmの長石 径1mmの黒色粒子含む	N61/灰	底部15%		（4.5）	
第31図	19	105	山茶碗	小碗	4区		第2遺構面確認面	径1mmの長石・黒色粒子 微細透明石英含む	7.5YR7/2明褐灰	口縁部～底部10%	（7.88）	（3.84）	2.4
第31図	25	106	陶器	仏餉器	4区		第2遺構面確認面	径1mm以下の白色粒子少量 2mm以下の黒色粒子含む	10Y7/1灰白	脚部100% 裾部95%		4.2	
第36図	19・21	112	山茶碗	碗	5区	SX01		密　白色粒子含む	内面：10BG5/1暗青灰色 外面：25GY5/1オリーブ灰色	口縁部～体部30% 底部80%	（17.3）	（6.8）	5.6
第36図	19・21・25	113	山茶碗	碗	5区	SX01		径1mmの長石・黒色粒子 微細透明石英含む	10Y6/1灰	底部30%		高台径（6.9）	
第36図	19・21・25	114	山茶碗	碗	5区	SX01		径1mmの長石 砂粒・赤色粒子含む	7.5YR6/3にぶい褐	口縁～底部10%	（16.4）	高台径（7.88）	5.6
第36図	21	115	陶器	鉢	5区	SX01		径1mm以下の白色粒子・黒色粒子少量含む	N6/灰	底部25%		（9.5）	
第36図	21	116	山茶碗	碗	5区	SX01		径1～3mmの長石 1～2mmの黒色粒子 14mmの礫含む	外面～内面体部：10Y5/1灰 内面底部：5Y6/2灰オリーブ	底部～体部下半15%		高台径（8.0）	
第36図	21	117	山茶碗	碗	5区	SX01		径1～2mmの長石 1mmの黒色粒子 3mmの礫含む	10Y6/1灰	底部95%体部下半30%		高台径 6.7	
第36図	21	118	山茶碗	碗	5区	SX01		径1mmの長石 径1～2mmの黒色粒子含む	10Y6/1灰 釉：10Y4/1灰	底部60% 体部下半20%		高台径（6.9）	
第36図	19・21	119	山茶碗	小碗	5区	SX01		密　白色粒子含む	N61/灰	35%	（8.1）	（4.1）	2.85
第36図	20・21	120	山茶碗	小碗	5区	SX01		密　白色粒子含む	N7/灰白色	口縁～底部30%	（9.0）	（5.0）	2.2
第36図	21	121	陶器	壺	5区	SX01	南壁土層断面	径1mm以下の白色粒子・黒色粒子少量含む	露胎・断面：5YR7/8橙 釉：10YR5/1赤灰	底部25%		（10.5）	
第36図	21	122	陶器	鉢	5区	SX01		径1mm以下の白色粒子少量 微細な透明粒子微量に含む 黒色の吹き出し有	外面：10R3/2暗赤褐 断面：5Y7/1灰白 内面釉：2.5GY4/1暗オリーブ灰	底部～体部下部30%		（11.2）	
第36図	21	123	山茶碗	碗	5区	SX01		径1～4mmの長石 1mmの黒色粒子含む	7.5YR5/3にぶい褐 断面：N61/灰	底部100% 体部下半30%		高台径（6.7）	
第36図	21	124	山茶碗	碗	5区	SX02		径1mmの長石・黒色粒子含む	10Y6/1灰	底部25%		高台径（6.6）	
第36図	21	125	山茶碗	碗	5区	SX02	灰色粘土層	径1mmの長石 1～2mmの黒色粒子 茶色粒子含む	N61/灰	底部～体部下半10%		高台径（6.0）	
第36図	21	126	陶器	片口	5区	SX02		白色粒子・黒色粒子微量に含む	露胎：10YR6/2灰黄褐 断面：10Y7/1灰白 釉：N2/黒	口縁部～体部10%	（14.7）		
第36図	20・21	127	陶器	甕	5区	SX01		密　白色粒子含む	内外面：N6/灰	口縁～頸部10%	（23.9）		
第37図	20・25	128	灰釉陶器	碗	5区		調査区南壁土層断面	径1～2mmの長石・黒色粒子5mmの礫含む	5Y6/1灰 釉：10Y5/2オリーブ灰	口縁～体部10%	（16.0）		
第37図	20・25	129	山茶碗	碗	5区		表採	径1～4mmの長石 1mmの黒色粒子 茶色粒子含む	外面・内面底部：N61/灰 内面：N51/灰	底部～体部下半30%		高台径（8.0）	

図版番号	写真図版番号	挿図番号	種　別	器種	区	遺構	層　位	胎　　土	色　　調	残存率	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）
第37図	20・25	130	山茶碗	碗	5区		灰色粘土層	径1mの長石 1～2mの黒色粒子 橙色粒子？含む	外面:N4/灰 内面:10Y6/1灰	底部15％		高台径(6.28)	
第37図	22	131	山茶碗	碗	5区		表採	径1mの長石 1～2mの黒色粒子含む	N6/灰 釉:10Y4/オリーブ灰	底部30％		高台径(7.3)	
第37図	22	132	山茶碗	碗	5区			径1～2mの長石含む	外面・内面底部:N4/灰 内部体部:N6/灰	底部～体部下半25％		高台径(6.8)	
第37図	22	133	山茶碗	碗	5区		表採	径1mの長石・黒色粒子 赤色粒子含む	外面体部・内面 底部:10YR6/1褐灰 外面底部・内面 体部:7.5YR6/2灰褐	底部～体部下半40％		高台径(7.38)	
第37図	22	134	山茶碗	碗	5区		調査区南壁土層断面	径1～2mの長石 1mの黒色粒子含む	N5/灰	底部～体部下半25％		高台径(8.45)	
第37図	22	135	山茶碗	碗	5区	SX02	灰色粘土層	径1mの長石・黒色粒子 4mの赤色礫含む	2.5Y7/1灰白	底部30％		高台径(7.4)	
第37図	22	136	山茶碗	小碗	5区			径1mの長石含む	10Y4/1灰	50％		高台径(3.8)	
第37図	20	137	陶器	緑釉小皿	5区			径3mm以下の長石多く含む	露胎:5YR5/4にぶい赤褐 断面:5Y7/1灰白 釉:10YR2/1黒	95％	9.9	4.6	2.1
第37図	20	138	山茶碗	小皿	5区		表採	密　白色粒子含む	5Y8/1灰白色	100％	8.3	4.1	1.9
第37図	22	139	陶器	有耳壺？	5区			径1mm以下の白色粒子・黒色粒子・赤色粒子少量含む 3mmの灰色礫含む	5YR7/6橙	口縁部30％	(10.7)		
第37図	22	140	陶器	仏飯器	5区		表採	白色粒子・黒色粒子微量に含む	断面:N6/灰 釉:5Y5/3灰オリーブ	口縁部～体部10％	(10.9)		
第37図	22	141	陶器	碗	5区		緑灰色粘土層	長石・黒色粒子微量に含む	露胎:7.5YR4/4褐 断面:7.5YR5/2灰褐 釉:5Y5/3灰オリーブ	底部～体部下半35％		高台径(4.3)	(1.8)
第37図	20・22	142	陶器	梅文皿	5区		緑灰色粘土層（撹乱）	径1mm以下の長石・黒色粒子少量含む	露胎・断面:5Y8/2灰白 釉:7.5Y7/2灰白透明	80％	(11.1)	高台径3.3	4.6
第37図	22	143	かわらけ	皿	5区				10YR7/2にぶい黄橙	口縁部40％	(13.1)		

第５表　石器・石製品・玉類観察表

図版番号	写真図版番号	挿図番号	器　種	区	遺構・層位	石　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
第９図	25	46	環状石製品	17-1T	暗オリーブ色粘土（5層）	細粒砂岩	(2.7)	(1.6)	0.45	(2.96)	
第９図	25	47	ガラス小玉	10T	灰色粘土・褐色土層		0.45	0.45	0.30	0.08	孔径0.18cm
第30図	26	88	乳棒状磨製石斧	2区	緑灰色粘土（砂礫）層	輝緑岩	11.28	3.86	2.81	196.57	
第30図	26	89	乳棒状磨製石斧	2区	暗緑灰色粘土層	粗粒砂岩	10.3	4.36	3.72	267.22	
第30図	26	90	磨石？	2区	暗緑灰色粘土層	粗粒砂岩	10.6	7.1	4.64	412	
第30図	26	91	敲石	2区	排土中（表採）	礫岩	10.88	5.15	4.4	358	
第30図	26	92	敲石	2区東	暗緑灰色粘土層	含礫粗粒砂岩	13.05	10.08	3.71	592	
第30図	26	93	投弾？	2区		細粒砂岩	4.58	4.42	4.25	96.86	
第30図	26	94	敲石？	2区	暗緑灰色粘土層	砂質粘板岩	13.05	4.94	2.8	244.01	
第38図	26	144	敲石？	5区		中粒砂岩	12.29	4.7	3.75	283.19	

第６表　木製品観察表

図版番号	写真図版番号	挿図番号	器　種	樹種	プレパラートNo.	木 取 り	区	遺構	層　位	長さ（cm）	幅・径（cm）	厚さ（cm）
第９図	26	39	漆椀	ケヤキ	13708	横木取り柾目	20-1T		暗青灰色粘土層	—	—	2.8
第９図	26	40	不明	ヒノキ	13697	板目	16-2T		暗緑灰色粘土層	20.55	(3.15)	0.8
第９図	26	41	不明	ヒノキ	13698	板目	16-2T		暗緑灰色粘土層	(10.25)	(3.55)	0.9
第９図	26	42	不明	ヒノキ	13696	板目	9-2T		灰色粘土・褐色土層	(9.55)	(4.2)	(0.6)
第９図	26	43	不明	カヤ	13694	板目	8-1T		暗緑灰色粘土層	(11.0)	(3.0)	(0.8)
第９図	27	44	不明	ヒノキ	13695	斜め柾目	11-1T		灰色粘土・褐色土層	(12.7)	(3.85)	(1.5)
第９図	26	45	不明	ヒノキ	13699	板目	16-2T		暗緑灰色粘土層	(4.5)	(2.1)	0.6
第30図	27	95	小板状木製品	ヒノキ	13700	斜め柾目	2区		暗青灰色粘土層直上	3.7	3.2	0.6
第33図	27	107	楯部材・火きり板	ヒノキ	13703	板目	4区			(19.7)	(4.45)	1.1
第33図	27	108	曲物底板	スギ	13705	柾目	4区		灰色粘土層	(16.1)	(4.5)	0.8
第33図	27	109	不明	ヒノキ	13701	斜め柾目	4区			25.05	2.3	0.95
第33図	27	110	曲物底板	ヒノキ	13702	柾目	4区			(15.85)	(3.6)	0.8
第33図	27	111	漆椀底部	ケヤキ	13704	柾目	4区		緑色礫層直上	(7.45)	7.2	(0.9)
第38図	27	145	不明	ヒノキ	13706	柾目	5区		青灰色粘土層	(9.15)	(3.9)	0.5
第38図	27	146	不明	ヒノキ	13707	柾目	5区	SP77	青灰色粘土層	(14.65)	(3.5)	0.5

第７表　金属製品観察表

図版番号	写真図版番号	挿図番号	器種	素材	区	遺構	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）
第38図	28	147	不明	銅	5区	SX02	暗緑灰色砂質層	4.0	4.0	0.1	5.6
第38図	28	148	鉄砲玉	鉛	5-1T		に.ぶい黄褐色土層	1.6	1.6	(1.55)	(14.7)
第38図	28	149	キセル	銅	1区		灰色粘土層	(6.65)	0.6	—	(4.3)

第８表　銭貨観察表

図版番号	写真図版番号	挿図番号	種別	銭貨名	国名	初鋳年	区	遺構・層位	直径（mm）	重量（g）
第39図	28	150	銅銭	元豊通寶	北宋	1078年	5区		25.5	(2.2)
第39図	28	151	銅銭	大観通寶	北宋	1107年	5区		—	(1.2)
第39図	28	152	銅銭	宣徳通寶	明	1433年	5区		25.1	(2.3)
第39図	28	153	銅銭	宣徳通寶	明	1433年	5区		(25.8)	(2.0)
第39図	28	154	銅銭	寛永通寶（文銭）	日本	1668年	1区	灰色粘土層	25.2	2.4
第39図	28	155	銅銭	寛永通寶（新寛永）	日本	1697年	AT西端部	表土	23.0	2.2
第39図	28	156	銅銭	寛永通寶（古寛永）	日本	1636年	AT西端部	表土	23.9	3.2
第39図	28	157	銅銭	寛永通寶（新寛永）	日本	1697年	1区	灰色粘土層	24.7	3.3
第39図	28	158	銅銭	寛永通寶（新寛永）	日本	1697年	1区	灰色粘土層	22.8	1.7
第39図	28	159	銅銭	半銭？	日本	明治	2区	排土中（表採）	22.1	3.0

第５章　まとめ

第１節　弥生時代後期～古墳時代前期の遺構と遺物

１　検出遺構について

弥生時代後期～古墳時代前期の遺構面は２区第２面で確認されており、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝状遺構、小穴を検出している。遺構面の検出状況から、集落は調査区北西側の丘陵から派生する微高地上に立地しており、この微高地は南東方向に細長く延び、北東および南西側では谷が形成されていたものと考えられる。

遺物は遺構外からの出土が多く、遺構の所属時期を確定するのは難しいが、調査区内では竪穴住居跡が２軒検出されており、その他にも複数の溝状遺構が切り合っていることから、住居の建て替えが繰り返し行われ、集落が継続して営まれていた可能性が高いと考えられる。

志太地域の弥生時代後期前半の遺跡は、清水遺跡（藤枝市教育委員会1992）、上藪田モミダ遺跡（建設省中部地方建設局・静岡県教育委員会・藤枝市教育委員会1981）など、主に低地部に立地するが、後期後半には大津谷川流域の山王前遺跡（島田市教育委員会1988）、落合西遺跡（島田市教育委員会2000）、瀬戸川流域の滝川遺跡・萩ヶ谷遺跡（藤枝市土地開発公社・藤枝市教育委員会1980）、白砂ヶ谷遺跡（建設省中部地方建設局・静岡県教育委員会・藤枝市教育委員会1980）などが丘陵部に立地し、古墳時代前期には再び低地部に集落を形成するようになる。また、大津谷川流域の低地部に位置する矢崎遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての水田跡を検出している（静岡県埋蔵文化財調査研究所2001）。伊太谷川流域の丘陵に面した低地部に立地する上伊太遺跡についてもこれらの遺跡と同様の展開を遂げると考えられ、志太地域全体の集落の展開の枠組みと同様に捉えることができるものと思われる。

２　出土遺物について

２区第２面からは、菊川式の系統に位置づけられるものと考えられる弥生時代後期の土器や、古墳時代前期の台付甕・高坏・屈曲口縁鉢などが出土している。遺構からの出土遺物は少ないものの、包含層から出土した土器には弥生時代後期から古墳時代前期までの時期差が存在しており、集落がある程度の時期幅を持って継続していた可能性が高いと考えられる。

出土した石器には、乳棒状磨製石斧・磨石・敲石などがある。礫岩・砂岩・粘板岩・輝緑凝灰岩などの石材を使用しており、大井川水系の転礫を採取したものと思われる。

第２節　古代～近世の遺構と遺物

１　杭列（SA01～07）について

確認調査および本調査の結果、丘陵北東側の平坦部を中心に中世～近世の杭列が確認されており、水田が広がっていたものと考えられる。出土遺物より、本調査１区で検出した杭列（SA01）は江戸時代前半（17世紀頃）以降、２区東側で検出した杭列（SA02・03）は鎌倉～室町時代（14～15世紀）以降、４区で検出した杭列（SA07・08）は鎌倉時代（12～13世紀）頃に属する可能性が高いと考えられ、中世から近世にわたって継続して水田が営まれていたものと思われる。また、本調査４区では鎌倉時代頃に属すると思われる水田の杭列が２面にわたり検出されたが、出土した遺物に大きな時期差は認められない。伊太谷川の小規模な氾濫に伴い、水田が複数回作り直された可能性が考えられる。

『伊太邑故事記』によると、伊太村の開発は、鎌倉武士の手によって始められたものであり、その後幕藩制社会に至るまで人口が増加し続け、順調に発展した村であることが伝えられている（島田市史編纂委員会1968）。伊太谷川の小規模な氾濫は生じた可能性があるものの、大井川の洪水による被害を直接受けることがなく、比較的安定した村であったと考えられ、上伊太遺跡における杭列の検出は、鎌倉時代から江戸時代前半までの伊太村の水田域の一部が発見されたものとして評価できると考えられる。

２　石敷遺構・石組遺構（SX01・02）について

丘陵南側裾部（本調査５区）では、鎌倉時代に属すると思われる石敷遺構（SX01）および石組遺構（SX02）が隣接して検出されている。

SX02は石組の底部から泥が検出されており、長期間にわたって水が溜められていたものと考えられる。井戸の可能性も考えられたが、側壁を円形に２～３段積んであるのみであり、水溜として使用されていた可能性が高い。

SX01はSX02のある南東側に向かって緩やかに傾斜しており、SX01に関連する遺構であると考えられる。道状遺構の可能性も考えられたが、石敷の無い個所も多く、硬く踏み固めたような面が見つからない点から、現在のところ用途を特定できていない。

いずれの遺構も用途は断定できず、今後の類例の増加が期待される。また、SX01の南側は未検出であり、SX01・02周辺および杭列周辺から土器が多数出土していることから、調査区付近に同時期の集落が存在する可能性も考えられる。

３　出土遺物について

島田市伊太地区は、平安時代末から灰釉陶器生産などがなされた旗指古窯跡群（第１図27～29・31・34・35）と位置的、地形的にも関係が深い地域である。今回の調査により、出土点数は少ないものの、旗指古窯産の灰釉陶器が出土しており、上伊太遺跡が旗指古窯跡群生産陶器の消費地の一つであったことが明らかになった点は重要な成果といえる。

墨書土器も複数出土しており、「万・」などの吉祥句を墨書した山茶碗（第７図14）や、朱書きと墨書を施した山茶碗（第36図113・第37図129）、転用硯の可能性のある灰釉陶器（第７図７）なども出土している。こうした資料についても、今後の検討が期待される。

参考文献

河合　修　2001「青灰色のうつわ―榛原郡金谷町横岡字釜谷の灰釉系陶器について―」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』第８号

建設省中部地方建設局・静岡県教育委員会・藤枝市教育委員会　1980『国道１号藤枝バイパス（藤枝地区）埋蔵文化財発掘調査報告書第２冊　蛭ヶ谷遺跡・荘館山遺跡・白砂ヶ谷遺跡』

建設省中部地方建設局・静岡県教育委員会・藤枝市教育委員会　1981『国道１号藤枝バイパス（藤枝地区）埋蔵文化財発掘調査報告書第６冊　上藪田モミダ遺跡・上藪田川の丁遺跡・鳥内遺跡』

静岡県埋蔵文化財調査研究所　2000「弥生から中世にかけての複合遺跡―上伊太遺跡―」『静岡県埋蔵文化財調査研究所年報16（平成11年度事業概要）』

静岡県埋蔵文化財調査研究所　2001『矢崎遺跡Ⅱ』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第125集

静岡県埋蔵文化財調査研究所　2011『助宗古窯群・寺島大谷遺跡・寺島大谷古墳』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第243集

澁谷昌彦　1982「旗指古窯陶器生産の年代について」『静岡県考古学研究』13

澁谷昌彦　2007「藤枝市助宗古窯跡群の灰釉陶器生産と遠江・駿河の編年」『静岡県考古学研究』39

島田市教育委員会　1981『旗指古窯跡』

島田市教育委員会　1988『静岡県島田市埋蔵文化財報告　山王前遺跡発掘調査報告書』

島田市教育委員会　1996『静岡県島田市埋蔵文化財報告　旗指古窯跡第８地点』

島田市教育委員会　2000『静岡県島田市埋蔵文化財報告第32集　落合西遺跡発掘調査報告書』

島田市史編纂委員会　1968『島田市史　中巻』

藤枝市教育委員会　1992『清水遺跡　吐呂川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

藤枝市土地開発公社・藤枝市教育委員会　1980『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ―縄文・弥生時代編―』

藤澤良祐　2005『瀬戸窯跡群』同成社

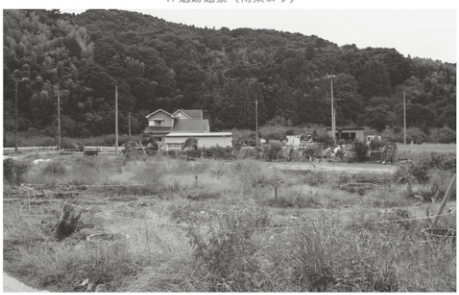
写　真　図　版

1. 遺跡遠景（北西より）

2. 遺跡遠景（南西より）

図版2

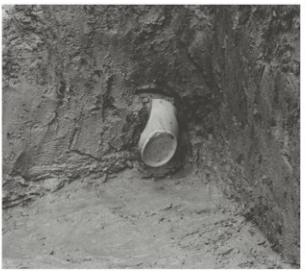
1. 遺跡遠景（南東より）



2. 4区調査前状況（北西より）

3. 4-1トレンチ完掘状況（南より）

1. 17-1トレンチ土器出土状況（南東より）



2. 7-1トレンチ土器出土状況（南西より）

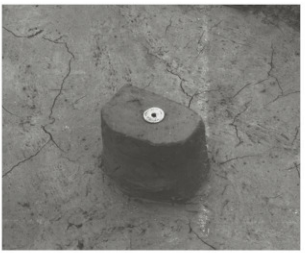
3. 4-2トレンチ土器出土状況（西より）

4. 1区SA01検出状況（北東より）

5. A・Bトレンチ完掘状況（南西より）

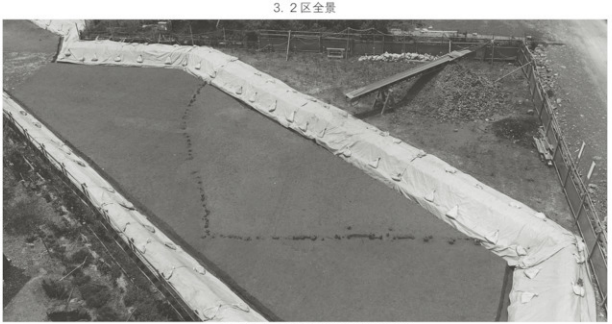
図版4

1．1区キセル出土状況（南より）



2．1区銭貨出土状況（南より）

3．2区全景

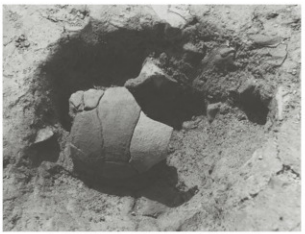


4．2区SA02・03検出状況（南東より）

1．2区全景（北東より）

2．2区SA03検出状況（東より）

図版6



1. 2区SP34土器出土状況（北東より）

2. 2区SH01土器出土状況（南より）

3. 2区SA03内土器出土状況（南より）

4. 2区SP36土器出土状況（東より）

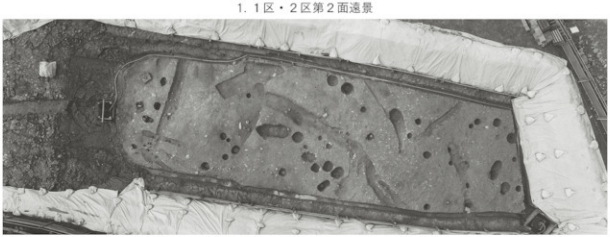
5. 2区SD01土層断面（南東より）

6. 2区南壁土器出土状況（北より）

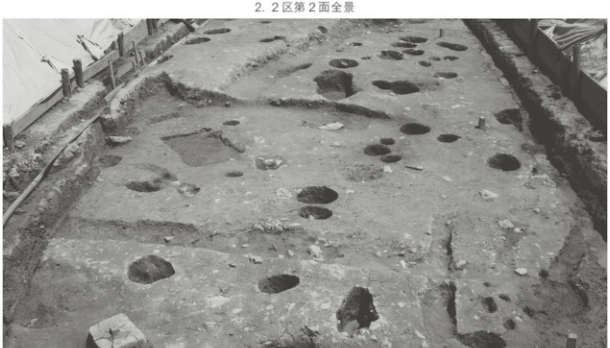
7. 2区乳棒状磨製石斧出土状況（西より）

8. 2区石製品出土状況

1．1区・2区第2面遠景

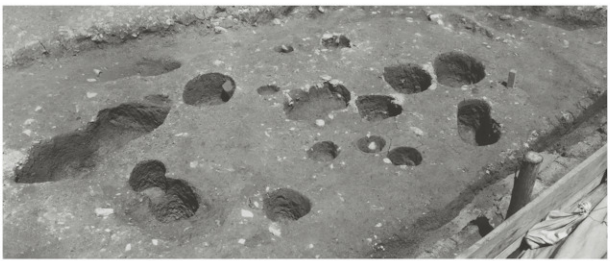


2．2区第2面全景



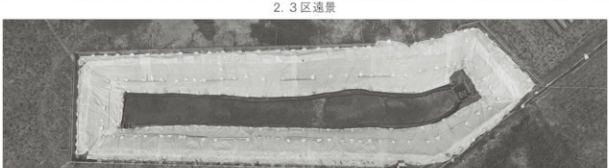
3．2区SH01完掘状況（南西より）

図版8



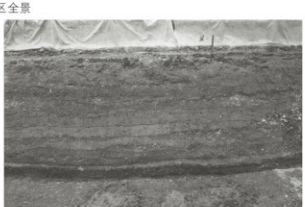
1. 2区SB02完掘状況（南より）

2. 3区遠景

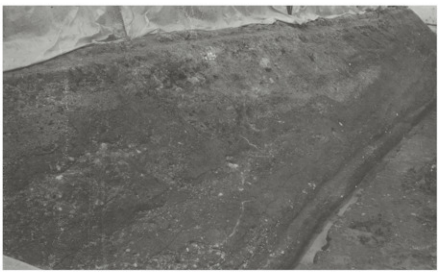


3. 3区全景

4. 3区北壁東側土層堆積状況（南より）



5. 3区北壁中央土層堆積状況（南より）



1．3区北壁西側土層堆積状況（南より）

2．4区SA08検出状況（北西より）

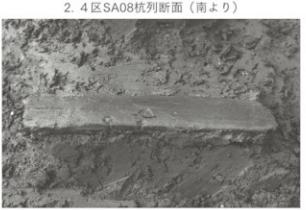
3．4区SA07検出状況（南西より）

図版10

1. 4区SA07断面（南より）

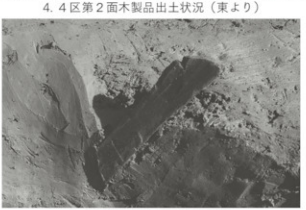
2. 4区SA08杭列断面（南より）

3. 4区山茶碗出土状況（北より）

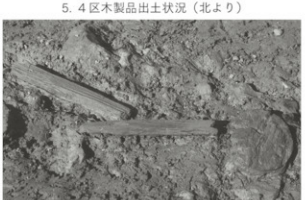


4. 4区第2面木製品出土状況（東より）

5. 4区木製品出土状況（北より）

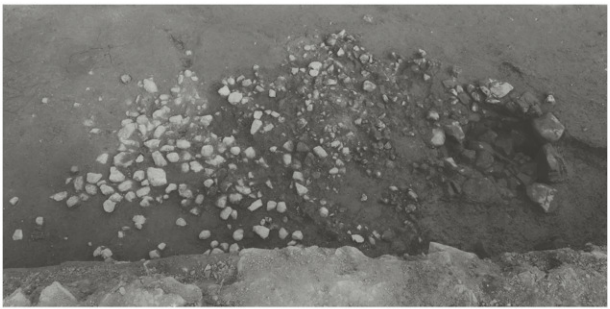


6. 4区第1面木製品出土状況



7. 4区木製品出土状況（南より）

8. 5区SX01・02遺物出土状況（東より）



1．５区SX01・02検出状況（南より）

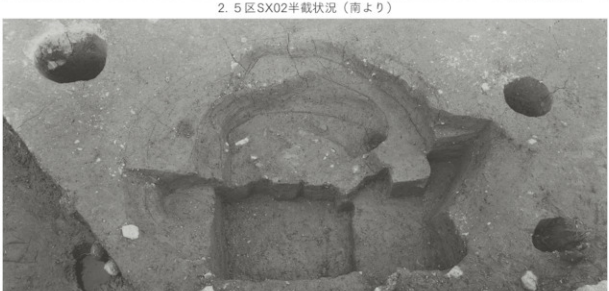
2．５区SX01・02検出状況（北より）

3．５区SX02検出状況（南西より）

図版12

1．５区SX02検出状況（南より）

2．５区SX02半截状況（南より）

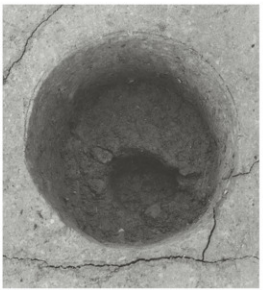


3．５区SX02完掘状況（南より）

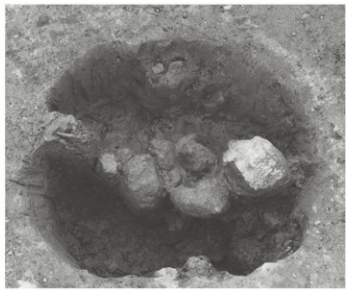
1．５区完掘状況（東より）

2．５区西側小穴群完掘状況（東より）

図版14

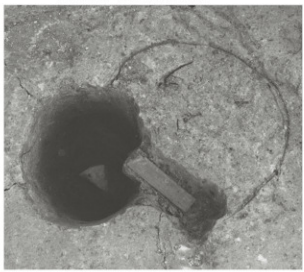


1. 5区SP71完掘状況（北より）



2. 5区SP74上面検出状況

3. 5区SP74下面検出状況



4. 5区SP77木製品出土状況（西より）

5. 5区SP76・77完掘状況（北西より）

6. 5区銭貨出土状況（西より）